ゼロの使い魔は殺人貴

D-54

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔は殺人貴

【Ｎコード】
Ｎ３０３０Ｉ

【作者名】
Ｄ－５４

【あらすじ】
ｔｙｐｅ－ｍｏｏｎの殺人貴が、ハルケギニアに召喚されます。殺人貴は月姫終了時点より数年経っており、知識はその時より豊富です。
けど記憶を失っています。思い出がありません。
そんな感じです。

第1話（前書き）

初めまして、初投稿のＤ－５４です。
未熟ながら投稿させていただきますすいません。
楽しんでいただけたら幸いです。
テンプレですいません。

第1話

桃色がかったブロンドの髪の少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは怪訝な顔をしていた。

本日、トリステイン魔法学院において大規模な儀式が行われていた。

儀式は魔法学院において2年生に進級するものが参加し、それによって使い魔となるべき生物を召喚し契約する、というものである。

使い魔がどういったものであるかはいずれ詳しく触れるものとして、生徒たちは各々順番に召喚を行い、魔法使いとしてのパートナーを手に入れる。そう言った儀式であると考えれば良い。

ルイズもその新2年生の中のひとりであり、故あって彼女は、この儀式に賭けていた。

ルイズに出番が回って来る。

大きな爆発の煙が晴れ、果たしてそこにいたのは、巨大なドラゴンや珍しい火トカゲ、神秘性溢れる幻獣や凶暴な魔獣でもない、どころか普通に森の中や街など何処にでもいそうな鼠などの小動物、それでもない。

……紛れもなく、人間だった。

しかもその姿は何とも奇怪である。見た事もない服を着ているが、見た目そこまで良い作りをしていないので、おそらく平民（これに関しての説明も、いずれさせてもらおう）なのだろう。体格からして男と見て間違いない。年齢は自分たちと同じくらいだろうか？だが顔は……よくわからない。

何故ならその平民（ルイズはその男を見た目だけで、瞬時にそう決めつけてしまっていた）は、顔を……詳しくは目の部分を、包帯でぐるぐるに巻いてしまっていたからだ。顎の部分はスッキリしているが、それ以上の事は、わかる筈もなかった。

そんな男が、本来使い魔を召喚するべきところに倒れていたのだ。ルイズを初めとした生徒、そして引率の教師までもが、各々首を傾げたり、顔をしかめたりするのは当然だった。

恐る恐る近づこうとして、

「う……ん」

そんなうめき声が男から聞こえると、ルイズはびくりと肩を揺らす。

男は身体を起こし、軽く頭をかきながら、当たりを見渡すように首をゆっくり左右に動かした。

「ここ……、どこだ？」

そう言って、首を傾げる。

目に包帯を巻いているのに、まるで見えているような言い草だ。

その事について訊いてみても良かったが、それより先に、男に訊いてみなければならない事があった。

ルイズは男に近寄り、

「……あんた、誰？」

と、言い放った。
男がルイズの方を向く。二人の目が合った。多分。
「えっと……俺の事、かな？」
「そうよ。あんた、何処の平民よ」
「平民？」
「ルイズ。『サモン・サーヴァント』で平民を召喚して、どうするの？」

ルイズの男への問答も不十分に、誰かが彼女にそう言った。その言葉が聴こえたのだろう、ルイズはその変化が容易に見て取れるほど、みるみると顔を真っ赤に染めていった。

「なっ！　ちょっと間違えただけよ！」
「『間違えた』って、いつもの事じゃないか！！」
「流石、ゼロのルイズだ！　まさか平民を呼び出すなんてなぁ！！」

あっはっはっ、と、ルイズにとっては耳障りな嘲笑があちこちから起こる。

「ミスタ・コルベール！！」

苛立ちを隠さないまま、顔を真っ赤に染めたルイズが後ろを振り返り、そこにいた眼鏡の中年男性に向かっていった。

「何かね？」
「お願いします、もう一度儀式のやり直しをさせてください」
「それはできない」

ルイズの嘆願も、コルベールと呼ばれた男――どうやら教員らしい――にあっさりと断られてしまう。

「何故ですか！？」

「知っての通り、今日の儀式は二年生へ進級するための大事な、そして神聖な儀式だ。召喚した以上、気に入らなくとも使い魔との契約は結ばなくてはならない」

「ですが……平民を使い魔にするなんて、聞いた事がありません！！」

ルイズの嘆願は続くが、コルベールは頑として首を縦に振らない。やがて彼女はがっくりと肩を落とし、次いで男の方へ向きなおった。どうやら交渉に失敗したらしい。

「……あんた、感謝しなさいよね」

「はい？」

ルイズは男のもとへ歩み寄り、そう言うと、絵画用の筆程度の大きさをした杖を胸の前にそえて、高らかに宣誓するかのように唱えながら、杖を振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン、彼の者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

唱え終わるとすぐに、彼女は男の顔を小さな両手で包み、顔を真っ赤にしながら、

「え？　えっ！？」

「じっとして！　……んっ！」

男に唇を重ねた。
男に唇を捧げた。
男に唇を預けた。
男に唇を委ねた。

「んんっ！？」

咄嗟の出来事に、男は反応が遅れた。回避も、防御も、逆にその唇の感触を味わう気概を持つ事も、できなかった。ゆっくりと、二人の唇が離れる。

「……終わりました」

ルイズは男に背を向け、教師コルベールにそう告げた、

暫しの呆然。そして数秒、或いは数十病の後に男が気をとりなおすと、彼は無言で立ち上がる。そしてルイズのそばに行き、とんとん、と、肩を叩いて呼びかけた。

「ねえ、君」
「……なによ」
「駄目じゃないか」

自分の使い魔となった彼に突然呼ばれ、ルイズは振り向き、怪訝な顔をした。
何か言ってくるのだろうか。だとしたら、平民のくせに生意気ね。わめくようなら、立場をわからせなくちゃ。
そんな風に思いながら、相手は平民だから問題ないにしても、多少の警戒心を持って、男の顔を見る。

だがその男の顔の、包帯の下から僅かに見えるその口から発した言葉は、見当違いのものであった。

「女の子が見ず知らずの男に対して、簡単に口付けをするなんて」

「……はぁ？」

思わずルイズは惚けた声を上げる。

そもそも相手は単なる平民なのだから、そう言う対象としては見ていないし、見るつもりもない。

……と、そこまで思い。

これは契約の儀式なのであって、性別なんか気にしていてはいけないし、と言うかノーカウントだし……と、何故かルイズは考え始めるとどんどん顔や頭が火照っていき、言訳じみた事を頭の中で駆け巡らせた。

その原因は、ルイズは気付く筈もないが、まず彼が男性であること。ルイズが初心（うぶ）であること。また、包帯を取ったら男前かもしれない、などが挙げられる。

また、彼自身にも、女性を惑わせる素養があるのかもしれなかい。

「あ、あんたいきなり、なにいってんのよ！？」

「いきなりなのはそっちだろう？　君は可愛いんだから、大事にしなきゃ」

「か、かわっ！？」

ルイズはあたふたとしながら声を上げる。

なお彼女は混乱していたので気付かなかった事実がその場にあった、とだけここに記しておく。

ただ彼女以外にも、この中にいる生徒のほとんどはルイズと使い魔のやり取りをバカにしたように見て笑っていたので、何名がそれに気付いただろうか。

「よ、よけいなお世話よ！！　これは儀式なんだから、数に入れないものなの！！」
「そうなの？」
「そうなの！！あ、あたしはまだ、大事に取ってるんだから！！」
「ならよかった」

嬉しそうに笑ったのだろう、男の口元が綻んだ。それだけでルイズは思わずどきりとしてしまう。
なんなのこいつ。
調子狂う。
そんな事を思いながら、ルイズが男から眼を逸らすと、

「……がっ、うぐっ！！？　」

突如、そんなうめき声を男が上げた。

「な、ちょっと！？」

いきなりだったので、男の様子にルイズは戸惑う。

「あ、あつっ！？」
「あんた、どうし……」
「落ち着きなさい、ミス・ヴァリエール。心配いりません、使い魔のルーンが刻まれているだけですよ」
いさめるようにそう言ったのはコルベールだった。
「使い魔の……あっ」

言われて、ルイズは納得したように呟いた。
契約をすると、使い魔にはその証としてルーンが刻まれる。通常は使い魔と言えば幻獣などなのだから、ルーンが刻まれる際にこういった反応は示さないのだが、成る程、人間が相手だとこういう苦痛を伴うのか……。
まあ、死にはしないだろう。
そうでなければ儀式の意義がなくなる。
それに、小さな鼠だって生き延びるのだから……と、ルイズは暢気にそう考える。

「〜〜〜〜〜！！」

……本当に、死なないわよね？
暢気に考えても、ちょっぴり不安がルイズに影をさした。

「？？？？あ、終わったようですね」

疲弊した男のそばに、コルベールが寄っていった。ルーンの確認をするためだ。

「ふむ、珍しい……というより、初めて見るルーンで――――」

言いかけて、教師は顔色を変えた。

「ミスタ・コルベール？」
「え？　あ、ああ……いえ、なんでもありません。珍しいものだったので、あとで調べてみようかと」

コルベールはそう言って、生徒の方へ向きなおる。

「ほら、立てるなら立ちなさい？」
「ああ、うん。ありがとう」
別に手を貸してもらったわけでもないのに、男はそんな風に礼を言って立ち上がった。
ルイズは少年を、探るように見つめた。
「……で、あんた」
「うん？」
男は首を傾げる。
その仕草一つ一つが、何というか、無垢だ。
屈託がない。
そんな風に思いながら、まず一つ、使い魔の主人として……最も重要な事を、訊く事にした。
「名前は何て言うの？」
「名前？」
男は鸚鵡返しにそう言って、う～ん、問うなりながら腕を組んだ。
「なによ、名前が無いとでも言うの？」
「いや、名前はあるんだ。あるんだけど……」
「何か、都合が悪いの？」
男はそう訊かれて、頭を勢い良く振った。
「どうしたの？」
「うん、名前だったね」

男はそう言って、にこやかに笑う。
なんだろう、とルイズは思った。
この笑顔は苦手だ。
妙に胸が、ぽかぽかとしてしまう。
初対面の人にする笑顔とは思えない。

「俺は遠野志貴。……君は？」

そんなルイズの思惑をおかまいなど出来る筈も無く、彼は遠野志貴と、そう名乗った。

「私？　私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ラ・ヴァリエール家の三女よ」

ルイズは胸を張って、自分の家名を誇示するように、志貴に返す。
しかし彼は、

「ルイズちゃんか。いい名前だね」

そう言って……やっぱり笑い、そして答えるようにルイズの顔が火照る。

「な、なな、なにいってんのよ！？　私はラ・ヴァリエールよ！？
知らないの！？」
「ごめん、知らない」
「ハァァ！！？　公爵家のラ・ヴァリエール家を知らないなんて、あんたどこの田舎者よ！！？」
「田舎者……なのかなぁ？」

志貴が困ったように呟く。

「国の公爵家を知らない平民を、田舎者じゃなくて何て言うのよ！！」
「そう言われても……何一つ知らないし」
いつものルイズなら、自分の家を侮辱された、とでも思ったかもしれない。
しかし「何一つ」という言葉が、ルイズには引っかかった。これも彼の、女性を惑わす素養のおかげかもしれない。
それはともかく、ルイズはその引っかかり故に、少し冷静になって来た。
「はぁ？」
「いや、だからさ」
志貴は頭を軽くかき、少し静まったルイズに答える。
「何一つ覚えてないんだ、……名前以外」

第2話（前書き）

すみません、トリステイン「魔法学校」ではなくて、「魔法学院」です。
第一話でそこを間違えまくりだったので修正しておきました。

第2話

「で、どういう事よ。覚えてないって」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの部屋。

召喚の儀式を終えたルイズは自室にて、本日より自分の使い魔となった青年・遠野志貴に、眉間にしわを寄せながら尋ねた。

「簡単に言うと、記憶が無いんだ」

それに対して志貴は、そんな重要な事をさもなんでもなさそうに、あっけらかんとそう答える。

「記憶が無い？」

「名前以外のね。俺がどういう経緯でここにやって来たのかはもちろん、俺がどんな土地でどんな風に育ったのか、家族構成はどうなっているのか、その他諸々……思い出と呼べるものが何一つ、残ってないんだ」

ルイズはその言葉を聞くと、面倒臭そうに顔を顰めた。

「つまり……あんたは今ここがどこなのか、全くわかって無いわけね」

「そういう事になるかな。できれば詳しく説明してくれると、助かるんだけど」

志貴は申し訳なさそうにそう言って、頬をかいた。

「はぁ……わかったわよ」
「ありがとう、ルイズちゃん」

またこれだ、とルイズは思う。
ことあるごとに見せる使い魔の笑顔は、彼にとって特に意味も無いのだろうが、それでもルイズは見蕩れてしまう。その事実は彼女の心を乱すようで、けれども不快ではなくて、という何となく煮え切らない状態にしてしまっていた。
ルイズはそっぽ向いて「……”ちゃん”はいらないわ」と呟いたあと、説明を始めた。

さて、一通りの説明を終えてルイズが一息吐いたところで、志貴は口を開いた。

「つまり、ここはハルケギニア大陸のトリステイン王国。君はその国の魔法学院の生徒、そして今日は使い魔召喚の儀式だった」
「そう、そして私が召喚したのが」
「俺だった、という事か」

ルイズの説明を適確に要約してみせた志貴に、頭は悪くないみたいね、と少し感心してみせた。しかし当の本人は、

「ごめん、やっぱり覚えてないみたいだ」

申し訳なさそうに、頭をかくだけだった。

「魔法を教える学院、って言うのは何か引っかかるけど」
「はぁ……、こんなの前代未聞よ。まさか平民が使い魔になるなん

て、思ってもみなかったわ」
「そうなんだ？」
「そうよ。ドラゴンとか、そういう格好良いのがよかったのに」
「ごめん」

……その仕草一つ一つがなんだか卑怯だ、とルイズは思う。
強く言えなくなる。

「まあ、今更言っても仕方ない事だけど」
「そううだけどね。ところでさ、使い魔って、何をするものなのかな？」

志貴に聞かれて、ルイズは腕を組むと「う～ん」と唸った。

「難しいの？」
「いえ、そんな初歩的な事から教えなきゃなんないってのが……まあいいわ」

ルイズは頭を振り、腕を組んでご主人様としての威厳を可能な限り示しながら、志貴を見た。
上下関係を少しでもわかりやすくするための、ルイズ精一杯のアクションである。
もちろん、そんな意図が志貴に伝わる筈も無いが、それでも彼女は続けた。まずは人差し指を立てて、

「まず一つ目。使い魔は主人に忠誠を誓い、その命令に従うこと」
「う～ん、死ねとかって命令じゃなければ」
「その点は安心していいわ。使い魔を大事にしないメイジになんて、なりたくないもの。まあ、あんたが何がしかの粗相をした場合は、それ相応のお仕置きをするけど」

「例えばどんな？」
「とりあえず、首輪と鞭を買っておくから。それから縄。必要なら鎖も。あとはその時に考えるわ」
ルイズの言葉に、志貴の口元が僅かに引きつる。
「怖いなぁ。……わかった、肝に銘じておくよ」
「よろしい」
ルイズは志貴の返事で小さく口端を釣り上げ、ほくそ笑んだ。効果覿面、とでも思ったようだ。
ルイズは次に中指を立てて、話を続ける。
「じゃあ二つ目。使い魔は自らの能力を用いて、主人の手助けをすること。例えば貴重な薬草や好物の在処を捜し当てたり、あと使い魔は感覚を主人と共有できるから、見聞き知った物事を主人に素早く知らせるとかって習ったけど……そういえば」
そこまで言って、ルイズは思い出したかのように志貴の顔……正確には、顔に巻き付いているものを指差した。
「あんた、目に包帯してるけど……目が見えないの？」
「包帯？」
言われてかれは、自分の目のあたりに触れてみる。
「ホントだ……なんか巻いてる」
「包帯って言ったでしょ。今まで気付かなかったってことは、やっぱり目は見えてないのね」

ルイズは残念そうに、溜息混じりに言った。
目が見えないともなれば、主人の手助けをするどころの話ではない。使い物にならない可能性すらある。自分は外れを引いてしまったんだ、と心底落胆した。
しかし志貴の返答は、ルイズを安心させるとともに、新たな疑問を呈することとなる。

「目？　いや、見えてるよ？」
「何だ、良かった。……は？」

少女は目を丸くした。

「それじゃあ何で、包帯してるのに気付かないの？　そんな雪みたいな白い包帯じゃ、視界が真っ白になる筈でしょう？」
「いや、普通にこの部屋が見えるよ」
「嘘はついてないわよね？　私の髪の色は？」
「桃色がかったブロンド。あと、そういう顔は控えた方が良いよ？　折角、可愛いんだから」

……またそういうことを言う！！
一瞬顔が火照りかけて、そういえばさっき（契約が終わった直後だったっけ）も同じこと言ってたな、とルイズは思い、幾分冷静になった。
考えてみれば、目に包帯をしているのにそんな感想がでてくるのは、妙な話であるからだ。

「ほ、ホントみたいね」

それでも、多少の動揺が隠せていないのは愛嬌というものだ。

「けど、じゃあ何でそんなの……って、わかんないんだったわね」
「ごめん」
「謝ることじゃないわ」

ルイズは顎に手を当て、考え込むように唸りながら、志貴の顔を見つめた。
そんな彼女の様子に、志貴はたじろいでしまう。

「え、えと……」
「……じゃあ、取ってみてくれない？」
「え？」
「顔が見たいわ。あんたの」
「……わかった」

多少戸惑いはしたものの、特に嫌とは言わずに志貴は包帯を取り始める。特に難しい巻き方をしていたわけではないようで、後頭部を数秒いじると、案外すんなりとほどけはじめ、

……果たして、志貴の素顔が曝されることとなった。

「……、」

温和そうな顔立ちだ。
彼との対話の中でルイズが思っていたことだが、人懐っこく、穏やかな気性でこちらの心を和ませるようなタイプの人間。それをそのままカタチにしたらこんな風になるんじゃないだろうかと思うような、そんな顔立ちだった。
しかしその中でも、決定的に不釣り合いな代物があった。

それは、眼。

イメージは、とても透き通った氷。それも、とても冷たい奴。
見た者をそのままを映し出し、視線に触れたもの全てを凍りつかせそうな瞳が、部屋の中を見渡している。
見られたらそれだけで、悪寒で凍傷にでもなりそうな、そんな錯覚。

「……特に何かあるわけでもなさそうね」

しかしルイズとしては、そんな風に使い魔に気圧されるわけにはいかないため、少し無理して強がってみせた。
志貴は何故か気怠そうに首を横に振る。

「変な線が見える……」
「線？」

志貴は頷き、続ける。

「変な線と、それから点……部屋中、ありとあらゆるところ、……君の身体や、俺の身体にも……まるで、綻びのような」

そして続けるその過程で、志貴の顔色がどんどん青ざめていくのにルイズは気がついた。

「ちょ、ちょっと大丈夫？」
「何だろう……気持ち悪い。頭が痛くなって来た」

慌ててルイズは志貴に包帯を巻き直すように指示。ほどなくして

巻き終えると、志貴の顔色は少しだけ良くなっていった。

「……落ち着いた？」

「迷惑かけて、ごめん」

それでも、僅かに憔悴している感は否めない。ルイズは盛大に溜息を吐き、気をとりなおして使い魔についての説明を行うことにした。人差し指、中指に続き、今度は薬指を立てる。

「じゃあ、え～っと……三つ目」

「え？　ああ、説明ね」

「そうよ、一番基本的で重要なこと。使い魔は己のすべてを駆使して、主人を守ること。あんたひ弱そうだから心配だし、これに関しては努力してくれとしか言えないわね」

「ん、わかった。努力するよ」

志貴はそういって、完全ではないが人懐っこく、笑ってみせた。

「よし、説明は以上。それで、あんたの寝床だけど……」

「え？　準備してくれてるの？」

「まあね」

ルイズが得意げ指さしたその場所には、藁が敷き詰めてあった。彼女の策の一つである。

元々幻獣などの使い魔目的の寝床だったので、藁。平民が使い魔になったということで、布団くらいは用意しようと思ったが、上下関係は初日にはっきりさせておいた方が良いと思いそのままにしておいたのだ。

反論するなら御仕置きして、身の程をわからせてやろう、ということである。

しかし志貴は、

「ありがとう」

と、感謝の意を示して来た。
ちょっぴり罪悪感が残った。

「……ま、今日は体調が優れないようだし、このまま寝ても良いわ。明日の朝までには体調を万全にし、私の役に立つことね」
「了解」
「朝起きたら洗濯物と、着替えを用意して、朝の鐘が鳴ったら私を起こしてちょうだい。あとの指示は、その時にするから」
「わかった、助かるよ」
「よろしい。じゃあ、明かり消すから」

志貴が頷くと、ルイズは魔力を飛ばして部屋の明かりを消し、二人は各々の寝所に着いた。

……なお。
この会話で、ルイズと志貴には決定的な認識の違いがあった。
これは「たいした問題ではない」と思い込み、彼女にそれを言わなかった志貴が完全に悪い。
認識の齟齬を看過できなかった人物が、この物語に登場するのは、……翌日の夜となる。

第2話（後書き）

タイトルに「殺人貴」と書いておきながら、殺人貴がでてくるのはもう少し先になります。
しばらくは和やか志貴を御楽しみください。
遅筆な作者ですので、これからどんどん遅くなっていくと思うのですが、挫けずめげずに頑張ります！！

第3話

「……ふぁ」

ルイズは窓から差し込む光に気付き、目が覚めた。

「ん、ん～～っ」

軽く伸びをし、寝ぼけ眼を擦りながら、今日の授業の準備を開始する。

いつもの朝。しかしいつもとは違う朝。

今日から二年生として本格的に授業が始まる。専門課程への振り分けとかがあるから、気を引き締めていかなければならない。

……などとは、まだ覚醒してい頭の中では考えることはできないが。

それでもてきぱきと（何故か寝ぼけたような状態なのに）、授業に必要なものを机の上に準備していく。

そしてさあ次は着替えだ、とタンスにに振り向く……その途中で。

「……あれ？」

藁が敷き詰められているのに気がついた。

そして、その藁束の中から、変なものがでていることにも。

「……かお？」

人の顔である。

眼が包帯でぐるぐるに巻かれた、人の顔である。

「……ね、猫が……猫王国が……」

その顔が、そんなことを呟きながら動く。
動きにあわせて藁がずれて……顔に繋がった身体が現れた。人の顔に繋がっているのは、やはり人の身体だ。

「……だれこいつ？」

ルイズは眠気眼を擦りながら、首を傾げる。

「……あんぱんを食す」
「……あんぱん？」

藁の上で寝ているそれが呟き続ける意味不明な言葉を聞いていると、だんだん頭が覚醒してきた。
……こいつ、私の使い魔だ。
そうだ。昨日召喚の儀式で、何の因果か陰謀か、平民が現れてしまい、仕方ないからこいつと契約したんだった。
その使い魔が、寝てる。
私は起きているのに。
あたしはおきたのに。
蹴り起こしてやろうかと足をあげて、

『頭が痛くなってきた』

と、彼が昨日、言っていたことを思い出した。
……体調が戻ってなかったら、さすがにそれは酷かしら。
ルイズはそう思い直し、彼を起こすことに決めた。
罰はそのあとにしよう。

「……勝負はハッスル。……無性に、ハッスル」

……やっぱり蹴ってやろうかしら、という気持ちをぐっとこらえ、

「ほら、起きなさい」

と言い、肩を揺らした。

「うぅ……ん」

それに応じて、彼はゆっくりと起き上がり、目を擦った。包帯をしているのに、意味はあるのだろうか。

「……あれ、君は？」

「あなたのご主人様の、ルイズよ」

「ご主人様？　……ああ」

彼は合点がいったかのように、掌をポン、と叩く。

「おはよう、ルイズちゃん」

「オ、ハ、ヨ、ウ」

暢気な彼・遠野志貴に、ルイズはとげとげしく返す。そんな彼女の反応に、志貴は首を傾げた。

そして考え、出した答えが、

「”ちゃん”がいらないんだっけ」

「そこじゃ、ないわよ！！」

ルイズを怒鳴らせてしまう。

「……あんた、頭痛とかはもう良いの？」

軽く溜息をついたルイズは、とりあえず気になっていることを聞いてみることにした。

「頭痛？」

「そう、昨日の」

「ああ、今は何ともないね。ぐっすり眠れたから。ありがとう」

「……あ、そ」

そしてそんな風に感謝されるので、ルイズはそっぽ向いてしまった。威厳も何もあったもんじゃない。

「今日は昨日のことも考えて特別に軽い罰ですますけど、明日からは私より先に起きなさい」

「あ、やっぱり罰はあるんだ」

「当然よ。それはあとで考えるとして、じゃあ、着替え用意して」

「わかった」

そういって、志貴はタンスの中をあさり始める。シャツ、スカートと用意して、

「そういえばさ」

「なによ」

志貴は何気なく思いついたこと口にしてみた。

「俺が劣情を持ったら、とか考えないの？」

「言ったでしょ、お仕置きを与えるって」

「怖いなぁ……はい」

笑いながら、着替えをルイズに手渡す。しかし、

「じゃ、着替えさせて」

「はい？」

ルイズがそんなことを言うものだから、志貴はそんな惚けた声をあげてしまう。

多分包帯の下で、眼をまんまるにしているだろう。

しかしこれは、貴族、それも公爵家の三女として育てられたルイズに取っては当たり前の認識なのだ。使用人は自分たちとは違う人間。使える平民は最大限使え、ということなのである。

ついでに言うと、これに加えてルイズ自身の志貴に対する無意識の牽制でもあった。

志貴は着替えをいったん床に起き、眉間に手を当てた。そして、

「俺が劣情を持ったら、とか考えないの？」

「言ったでしょ、お仕置きを与えるって」

さっきの問いを一字一句違わず繰り返してみると、さっきの答えを一字一句違わず繰り返された。

「いやいやいや、女の子の着替えを持つときの劣情と目の前に裸の女の子がいる時の劣情は、種類は同じでも別モノでしょう」

「はぁ？」

志貴の言葉の意味が分からず、ルイズは怪訝そうに志貴を見た。

「だから、襲われるかもしれないんだよ？」

仕方ないので志貴は、ちょと露骨な表現をしてみる。それを聞いたルイズは、見る見るうちに顔を真っ赤にしていった。

「なっ……」

「ただでさえルイズは可愛いんだから、気をつけないと」

「な、な、なぁぁ〜〜〜！！」

ようやくルイズは志貴が置いた着替えを奪い、彼に背中を向ける。

「き、きき着替えるから、でででで出で行きなさい！！」

「りょうかい」

志貴は頷き、茹だったルイズを残して部屋から出た。

「フンフン」

「ん？　なんだおまえ？」

志貴が部屋の外で待っていると、何か妙な奴が足下にやって来た。真っ赤な鱗の、……トカゲ？　でかいなぁ。

「フンフン」

「どうしたんだ？　俺に用があるのか？」

トカゲみたいなそれは足下で興味深そうに、志貴を観察するようにして離れない。しきりに彼の周りを回っていた。

「懐かれたかな……」

少し照れくさそうに志貴が呟く。

「フレイム〜！」

「お？」

そこで、そんな女性の声が聞こえた。それに反応したトカゲ（？）は志貴の足下から離れて、声がする方へ這っていった。

それに倣い、志貴もそちらに顔を向けてみる。

「こんなところにいたのね……あら？」

そこには、燃えるような赤い髪に褐色肌の、背の高い女性が立っていた。

「や、おはよう」

目が合った……のかは、判断に困るところだ。しかしきっかけと言えばそれ以外に思いつかないので、おそらく目が合ったのだろう。志貴は女性……いや、ルイズと同じ制服を着ているので生徒なのだろう。少女というには若干大人びている気がするが……に挨拶した。

それに対し、少女―（ビジュアルに多少の違和感があるが、やはりそう呼ばせてもらおう）は優雅に微笑む。

「おはよう。あなた確か、昨日ミス・ヴァリエールに召喚された使い魔ね？」

「ああ、遠野志貴って言うんだ」

「トーノシキ？　変わった名前ね」

「発音が気になるけど……、志貴でいいよ」

「わかったわ、ミスタ・シキ」

少女が言うと、志貴はくすぐったそうに笑った。

「どうしたの？」

「いや、文化が違うんだなって。ファミリーネームは遠野の方なんだ」

「そうなの？　ますます変わってるわね」

少女はきょとんとした顔でそういうが、「まあ良いか」と微笑んで、軽く胸を張った。

彼女の女性的な、少女っぽくない部分が強調され、志貴は一瞬だけルイズのそれと比較してしまう。

「あたしはキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アルハイツ・ツェルプストー。私も、呼ぶときはキュルケで良いわ、シキ」

「わかった。よろしく、キュルケ」

そんな思考も一瞬、今度は再び「フンフン」と鳴きながら志貴の足下で、赤いトカゲがすり寄ってくる。自己紹介でもしたいのか。

「で、この子はフレイム。あたしの使い魔よ」

「よろしく、フレイム」

志貴がそういうと、フレイムは彼の足下で嬉しそうに喉を鳴らした。気に入られたらしい。

「着替え終わったわよ……ツェルプストー！？」

「はぁい、ミス・ヴァリエール」

志貴の背後でドアが開き、着替えが終わったルイズがでて来て……頓狂な声を上げた。
対する（？）キュルケは手をひらひらと振り、何とも余裕そうに挨拶をする。

「あんた、なにしに来たのよ」
「ずいぶんな挨拶ね。折角あたしが、使い魔を自慢しに来たのに」
「そんな理由で来といて、文句言うんじゃないわよ！！」

逆にルイズは余裕が無い。
彼女を嫌う何かがあるのだろうが、とにかくルイズはキュルケのことを嫌っているようだ。キュルケはそうでもなさそうだが。

「それにしてもルイズ、面白い使い魔を召喚したわね」

キュルケは志貴を繁々と見ながらそう言う。

「なによ、嫌みのつもり？」
「初めはそのつもりだったんだけどね。この子が、あたしの使い魔がシキを気に入っちゃって」
「このこ？」

キュルケが指差し、そこへルイズが目線を向ける。志貴の足下だ。

「これって……サラマンダー？　しかも火竜山脈の！？」
「そ。好事家が見れば歓喜して、そりゃあもう値段なんかつけられないと思うの。だから自慢しようと思ったんだけど……ご覧の通りよ」

キュルケは溜息をつく。

「けどまあ、なかなか良い男みたいだし、仕方ないわね」

「ちょっと何よ、あんたあたしの使い魔にちょっかいでも出す気じゃないでしょうね」

「んふふっ、場合によっては……吝かじゃあ、ないわねぇ～」

キュルケは流し目で、誘うように志貴を見る。それに気付いた志貴はキュルケの方を向き、

「そんなに凄いんだ、フレイムって？」

発した言葉は、ワンテンポだけ話題から遅れていた。

「ええ、だから正直、かなり羨ましいわ。『メイジの力を見るには使い魔を見ろ』なんて言われているくらいだから。……それなのに、私はあんた。どういうことなのよ、これ」

ルイズは語っているうちにだんだん気分に暗雲、いや、嫉妬だろうか、が立ちこめていき、言い終えると恨めし気に志貴を睨んでいた。

「まあ良かったじゃない。召喚すらできなかったら、それこそホントに『ゼロのルイズ』だったわよ」

「あたりまえよ！！」

キュルケは楽しそうにそう言ってルイズを窘めるが、やはりルイズは余裕が無さそうにそう言い返す。その光景はどこか、妹をからかう姉と、それに反発する妹のようだ。

「仲がいいんだね」
「どこがよ！！」

ルイズは反発するが、志貴には……というよりこの光景を見たなら誰もがそう思うだろう。微笑ましすぎて、それ以外に見えない。事実、キュルケは否定しない。見た目以上に、精神がルイズよりだいぶ大人なのだろう。

「それに使い魔にしたんならその包帯の下、多分見たんでしょう？良い男じゃない」

それを聞いたルイズは志貴を一瞬だけ見て、その間に志貴は首を横に振る。「包帯取ったの？」「取ってないよ」というアイコンタクト。

使い魔になって一晩明けただけなのに、なかなかの連携だ。これが「感覚の共有」という奴かもしれない。

閑話休題。

「何であんたにわかんのよ」
「良い男ってのは、良い男の熱を纏っているものなのよ」
「それらしいこと言って」
「あなたには分かんないか。まあ、大事にしなさい」

そう言って、キュルケは志貴に向きなおる。

「じゃ、またねシキ」
「うん、じゃあねキュルケ」

キュルケはそれだけ言うと、フレイムを連れて去って行った。

「……なんであんた、ツェルプストーと仲良くなってんのよ」
「フレイムに懐かれて、それで仲良くなった、かな？」
ルイズはジト目で志貴を睨み、志貴は曖昧にそう返す。
その返事に何を思ったのか、ルイズは志貴の方へ向きなおった。
「言っとくわよ。あんたがどこの女と親しくなったり、恋仲になっても何も言わないけど、あれだけは別。あの女に懸想したら、絶対許さないわよ！！」
ルイズの怒鳴り声が廊下に響いた。
「……特にそんなつもりはないけど、何で？」
「それは」
一息置いて、ルイズは志貴の顔を見つめる。
「ツェルプストー家が、私の家の……不倶戴天の、敵だからよ」
その迫力に、志貴は思わず息をのんだ。

ルイズと志貴は教室で、女性教師の講義を聴いていた。
……という風にあからさまに場面を飛ばすのもあれなので、その間に何があったのかを簡潔に説明しよう。
まずルイズがキュルケを嫌う理由だが、実にあっけない理由だった。

なんでも、先祖代々恋人をキュルケの一族に寝取られ続けたらしい。ルイズはそんなことになってないらしいが、要は逆恨みである。
先祖代々嫌っているから嫌い。何とも分かりやすく、しかし志貴にはなんだか寂しい理由に思えた。
次に朝食だが、志貴はルイズが朝食を自分用に頼んでくれていたことに感謝し、嬉しそうに食べていた。だがこの朝食、貴族用の豪華なものとは違い、実に質素なものだった。まるで「贅沢は敵です」とでも志貴に対して言っているような、貧しい感じのスープと小さなパン。
それでも志貴は文句どころか感謝をしてくるものだから、ルイズの良心がちょっぴり痛んだ。
そして使い魔である志貴を連れて教室に入り、いくつかの嘲笑や『ゼロのルイズ』などの揶揄を撥ね除けながら、

現在に至る。

「ねえ」

志貴は授業中、教師が言っている幾つかの言葉を疑問に思い、ルイズに聞いてみることにした。

「なに？」
「あの先生が言ってる、ラインとかトライアングルって？　どうやら魔法の実力をさしてるみたいだけど」
「ああ、それね」

ルイズに曰く、まず魔法というのは火、水、風、土の四元素からなっており、通常メイジの得意な魔法はこの４つのどれかに属する。
そして魔法は属性の上に属性を重ねることで強力になり（これを重ねがけと言うらしい）の重ねがけのできる属性数が、メイジの実

力を測る指針となる。
呼び方は、属性単発でドット、二重属性でライン、三重属性でトライアングル、四重属性でスクウェア（これが最高位らしい）。平面図形になぞられている。
属性の重ねがけは同じ属性でも可能で、例えば火属性に火属性を重ねてより大きな炎に、という風にもできる。
なお、これ以外にも亜人やエルフが使う『先住魔法』、それから伝説と呼ばれる第５の系統もあるが、混乱させるだけだろうと思い、ここでは説明しなかった。

「じゃあ、あの先生は上から二番目のランクってことになるのか」
「まあ戦闘技能とかになると話は別だけど、魔法の実力としてならその認識であってるわ」

ルイズはさらに続けた。
メイジには自身の得意な属性にちなんだ二つ名がつけられる。「例えば」と言って指差す、先程ルイズが言い争った少年の二つ名は『風上』（ルイズは先程彼を『かぜっぴき』と言っていたが）。キュルケは『微熱』と呼ばれているらしい。

「あれ？　じゃあルイズの『ゼロ』っていうのは？」

志貴のその言葉に、ルイズはこう思った。

（気付かれた）

調子に乗って喋りすぎた自分を呪った。
ゼロのルイズ。
それは自分のコンプレックスを象徴する、ルイズにとっては二つ名などでは断じて無く、むしろ忌み名なのである。

「どうしたの？」
「い、いえ。それはね」
ルイズが答えに窮していると、
「それではミス・ヴァリエール、お願いできますか？」
女教師がそう言って。
その瞬間、教室内が硬化する。
「ミス・ヴァリエール？　どうしたのですか？」
硬化というより凍結と言った方が正しいだろうか。そんな冷えきった空気を読み切れてない教師は、もう一度、急かすようにルイズをよんだ。しかしルイズは思い悩むような仕草をするのみ。
どうしたというのだろう？
「先生」
そんな中、ひとりの女の子が手を上げた。金髪巻き毛の女の子で、すらりとした細くスレンダーな感じだ。
「何です？　ミス・モンモランシ」
そしてモンモランシと呼ばれた少女が、真面目な顔で進言した。
「やめておいた方が良いです」
「それはなぜ？」
「危険です」

少女の切実な言葉に、クラスメイト全員が頷く。そしてその反応を見るまでもなく分かってたのか、ルイズは俯き、悔しそうに拳を握りしめていた。
先程のやり取りとは違い、ルイズは一言も反論しない。

（ルイズ？）

そんなルイズの様子を、志貴は心配そうに見ていた。明らかに、昨日や今朝の彼女とは違うからだ。
そのため志貴には、教師と生徒が何か言い合っているようだが、その内容は一つも彼の耳に入らない。
やがてルイズは意を決して顔を上げ、

「やります。やらせてください」

と言って、教壇へ向かった。

……そのすぐ後に、教室内に轟音が響き渡る。

第3話（後書き）

何かキュルケのキャラが違う気がしても気にしないでください。
キュルケファンの方、すみません。

あと、志貴がフレイムに懐かれるのは何となく志貴は動物に好かれそうなイメージが僕の中にあるので。ほら、レンとかみたく。
鳴き声分かんないので「フンフン」と匂いを嗅ぐような感じにしてみました。
フレイムが雌だったらちょと面白いんだけどな、と思ってみたり。
ネタ的に。

……と言う、言訳。すみません。

第４話（前書き）

どうも、遅くなってすいません。
そして次はもっと遅くなるかもしれません。
重ねてすいません。

第4話

轟音とともに発生した爆風に耐えきれずに、軽い身体を吹き飛ばされながら、ルイズは思った。

ああ、またか。

サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントを成功させたからもしかしたら、と淡い期待を抱いた自分が愚かしい。たとえ何の取り柄も無い平民がゲートをくぐって現れたのだとしても、契約を成功させた以上は私の使い魔だから、私はメイジとして僅かでも自信を手に入れて、だからこそこの場に立つ決心をしたのに。

もう「ゼロ」などと呼ばれないために。

けれどそれも、儚い夢想だった。やっぱり「ゼロ」の烙印は、そう簡単には拭えないのか……。

どん、と、背中が柔らかい何かにぶつかった。

柔らかい？

「あぶなかったなぁ」

考えるよりも早く、しかしゆっくりと、ルイズは声がするところへ顔を向けた。

「凄い爆発だったね。大丈夫かい、ルイズ？」

使い魔である遠野志貴が、ルイズを優しく抱きあげていた。

いつもなら皮肉にしか聞こえない言葉を、発した彼からは嫌みなど微塵も感じない。

ルイズは自分が手にした僅かな「自信」を、ぼんやりと眺めていた。

「もぅ……、何も見えないじゃない」

キュルケは爆発によって発生した煙に包まれながら、困った様子で爆心地点を眺めていた。

いつも通りのことである。

ルイズはいかな魔法を使おうとしても、必ず「失敗して」爆発を引き起こしてしまう。

魔法成功率ゼロ、故に「ゼロのルイズ」。

周りに眼を向けてみる。ほかの生徒たちもキュルケと同じく薄い煙に包まれながら、「ゲホッ、だからいったんだよ！！」「もうどうせ使えないんだから、学校くんなよ！！」などと、非難がましくルイズを罵倒している。

しかしキュルケは何も言わない。彼女はほかの生徒たちより少しだけ年上なためか、周りと比べて冷静な観察眼を以てして、このように考えていたからだ。

（何か気になるわね……「失敗して爆発」って。火元も無いのに）

キュルケがルイズをからかうことは多々あっても、バカにしたり、見下したりはしないのは、（まず彼女なりの優しさという前提を差し引けば）この疑念が根本にあったからである。

それは火のトライアングルメイジである彼女だからこそ持つ疑念かもしれない。

しかしそれに気付いた生徒は、少なくとも騒ぎ立てる連中にはいない。

「……ルイズも苦労するわね」

白けた眼で周りを見ながら、キュルケはぼやいた。

そんなとき、キュルケの服の袖をクイクイと引っ張る少女が一人。

「あら、タバサ。どうしたの？」

タバサと呼ばれた少女は無言で、とある場所を指を指した。そちらを見ろ、ということらしい。

その場所は、爆発が起こった場所……の、すぐ隣。

「え？　あれ……シキ？」

怪訝そうに声を上げたキュルケの横で、タバサは首を傾げた。

「シキ？」

「彼の名前よ。トーノ・シキっていうらしいわ」

「そう」

「けど、いつの間にあそこまで移動したのかしら。全然気付かなかったわ」

まあご主人様を助けるって意味では立派に使い魔してるわね、などとキュルケが感心する隣で、タバサは無表情に、しかし瞳には僅かな興味の色を宿して、志貴を見ていた。

先程の爆発騒動で、ルイズは罰として教室の片付けをさせられている。志貴はその片付けの手伝いを買って出たのだが、ルイズはそれを拒んだ。
なんでも理由は、「あんたの責任じゃないから」だそうだ。
志貴としてはルイズから受ける罰の代わりにでもならないかな、という気持ちの安易な提案だったのだが、そんな風に言われるのは少し意外だった、むしろ提案せずとも「あんたも手伝うのよ」的なことを言われるかと覚悟していたのだ。
それどころか、提案されたのは志貴の方だった。
吹き飛んだ自分を受け止めてくれたお礼なのかもしれないが、ルイズは

「食事をとって来なさい。朝のより良いのを、私の名前を使えば食べれるから」

と言って来たのだ。
志貴には思いがけない提案だった。朝食に関しては確かに少し物足りなく思っていたが、自分は平民で使い魔だし、ルイズにも体裁はあるだろうし、何より身元不明の自分に寝食を確保してくれた彼女に対して、志貴としては是非も無かったからだ。
そんなわけだから、そのあと少しだけルイズと言葉を交わしてから別れ、食堂に訪れていた。

（ルイズ、少し落ち込んでたな）
「あの……」
「ん？」

志貴がそんな風に考えていると、後ろから声をかけられた。
振り向いた志貴の目の前に立っていたのは、

『志貴様』

メイドだった。
メイドで少女だった。

（……誰だ？）

そんなのは見れば分かる、という分かりやすい程ステロタイプなメイド少女は、興味深そうに志貴の顔を覗き込んでいた。

「えっと……、君はここの給仕さんかな？」
「！　は、はい。シエスタと言います」

志貴が聞くと、少女・シエスタは慌てた様子でそう返し、頭を下げた。

「あの……、失礼ですが、眼が？」
「え？　ああ、これ？」

さてどうしたものか、と志貴は考える。
どうやら彼女は自分の眼に包帯が巻いてあることに興味を持ったようで（或いはそれもメイドとしての仕事かもしれないが）少女の気遣いの一種なのだろう。志貴が考えたのは、全盲の振りをするか、それとも眼は見えると正直に言うか、だった。
前者ならば、これから、少なくとも彼女の前では、眼が見えない振りをしなければならない。しかしそれならばよけい且つ面倒な説明はしなくてすむ。
後者ならば、説明するのが面倒だ。

「あの……？」
「あ、ごめん」

怪訝に思ったのかシエスタが尋ねると、志貴は苦笑した。
彼女の眼を見ると、興味半分、親切心半分と言ったところだろうと志貴は推測する。そして、親切で言っているのなら煙に撒くのもどうかなと思い、正直に言う事にした。

「いや、これ見えてるんだよね。不思議なことに」
「そうなんですか？」
「うん」

頷いて、志貴は頭をぽりぽりと軽くかく。どういう風に説明すれば良いか、巧く思いつかないのだ。
そんな彼の仕草を見て察したのか、今度はシエスタが微笑んだ。

「あなたが噂のミス・ヴァリエールの使い増さん、ですか？」
「え！？　噂になってるの！？」
「はい、それはもう。ミス・ヴァリエールが『全盲の平民を召喚した』って」

平民、という言葉に関しては既にルイズから講釈を受けていた。
言葉面から分かるように階級を示すものであり、ルイズたち貴族と平民との間には明確な差異が存在する。
それは、魔法が使えるか否か、という点だ。
ただそれだけ（と、志貴は思う）の違いで生活水準ががらりと変わるのは、おそらく志貴が街へ行けば分かることなのでここでは詳しく触れない。
もちろん記憶の無い志貴には（素養があるかどうかは別にして）魔法が使えないし、何よりルイズに曰く、見た目雰囲気第一印象が

それっぽくないので、彼は平民にカテゴライズされる。

「何か、恥ずかしいな」

「それで、どういったご用件ですか？」

「ああ、俺のご主人様の御厚意で。朝のより良いご飯を貰ってこいって言われてね」

「そうでしたか、じゃあマルトーさんに掛け合ってみますね。あそこの空いてる席に座っててください」

志貴は「分かった」と言って席に向かおうとして、一つ、忘れていたことに気付いた。

「シエスタ」

「はい？」

志貴が呼びかけると、彼女は振り返った。

「俺は、遠野志貴。志貴って呼んでよ」

「はい。分かりました、シキさん」

二人は互いに微笑み、そしてシエスタはぱたぱたと足音を立てて厨房へ向かった。

「さてと……ん？」

それを見送った志貴は席へ向かおうとして、あるモノに気付いた。

食堂のとある箇所で少年たちが談笑をしている、その足下。

小さなビンらしきものが転がっていた。

掃除を終えたルイズは、志貴がいるであろう食堂へと向かっていた。

「はぁ……」

気分は、思わず溜息がでてしまう程度に暗雲が立ちこめている。
原因は言うまでもなく、先程の爆発騒動である。
これでも少しは立ち直った方だ。騒動直後の彼女など、酷く不機嫌な態度でほかの生徒たちの罵詈雑言に口答えしながら耐えていたのだ。分かりにくいかもしれないが、そうでもしなければ気がまぎれず、部屋で丸くなってひたすら呪詛でも唱えるほどのではないかと思うほど、落ち込んでいただろう。
それを立ち直らせたのが、志貴だった。

『凄い爆発だったね、ルイズ。あれが君の魔法かい？』
『……そうよ。悪かったわね』
『悪い？』
『あたし、魔法を使おうとすれば必ずこうなるの。どんな簡単な魔法を唱えても、必ず爆発して、こんな風に回りに迷惑かけちゃう。魔法が成功した事ないの』
『じゃあ、ゼロって』
『魔法成功率ゼロ。だから、ゼロのルイズ』
『ん……と』
『何よ、馬鹿にしないの？　魔法が使えないなんて、こんな出来損ないのご主人様に仕えなきゃなんないのか、とかね』

『そうじゃなくてさ。魔法って、失敗したら必ず爆発するのか？』
『えっ……？』
『もしそうじゃ無いなら、魔法が使えないって言うのは違うと思うな。意図したものと違うって言う意味なら成功率はゼロだけどさ』
『えっと……』
『魔法はよく分かんないけどさ、ルイズなら必ず使えるようになると思うよ。爆発って言うのにも意味があるかもしれないし。剣を作ることだけに磨きをかけた奴だっているしね』
『……何それ、鍛冶屋の話？』
『あれ？　……まあ、落ち込むことは無いよ。頼りないかもしれないけど、俺を召喚したわけだし』
『……そうね、ありがとう』

彼としては普通に接しただけだろうが、それでもルイズには効果有りだ。
おまけに、これから考えることの指針をくれたのだから、彼には感謝しなければならない。
けど、使い魔に慰められるなんて、情けない……。
ルイズは再び溜息をついた。

「爆発に意味、か」

爆発と言えば火だろうか？　けどキュルケに聞くのは絶対嫌だし、ほかに火のメイジと言えば……あ、コルベール先生に聞いてみるのも良いかもしれない。図書館の本を片っ端から読み返してみるのも一つの手だ。

そんなことを考えながらルイズが食堂に入る……

「決闘だ！！」
「俺が勝ったら、あの二人の女の子と、ルイズに謝ってもらうからな」

な、何してんのよあのホウタイわぁぁ～～～～～～～～！！！！？？？？？

第４話（後書き）

ぜ、全然進んでない……

ルイズってこんなにネガティブちゃんだっけ？　シエスタってこんな感じで大丈夫？

いろいろ自信が無いので指摘されたらその都度修正していきます。

ストーリーをスムーズに勧めるには、どうすれば良いでしょう？

誰か教えてください

第5話（前書き）

皆さん、一ヶ月振りです。
遅くなってすみません

第5話

「オールド・オスマン！！」

焦っているような大きな声とともに、トリステイン魔法学院の学院長室の扉が開いた。

「なんじゃね、コルベール君。騒々しい」

その呼び声に胡乱気に応えたのはこの魔法学院の学院長、オールド・オスマン。学院最高のメイジである。

老学院長とともに、何故か僅かに頬に桜色を浮かべた秘書のミス・ロングビルも、慌ただしい来訪者に訝し気に視線を送った。

「はぁ、はぁ、火急のご報告があって、参りました」

「君が火のメイジであることを掛けてのギャグかの？　あまり笑えんぞい、火急なのはむしろ君の毛髪じゃろうに」

「茶化さないでください！！」

冗談を交えたオスマンに対し、ミスタ・コルベールはまじめにそう返す。その様子に思考を切り替えた老人は、神妙な顔つきで言った。

「……つまらぬことじゃないじゃろうな？」

「……まずはこれを」

そういってコルベールが提示したのは一冊の古文書、その中のとある資料。

それ見たオスマンは、威厳ある声でロングビルにこう言った。

「……ミス・ロングビル、席を外してくれんかの」

「ア、アンタ！！」

食堂に入るなり騒ぎの中心に志貴を見たルイズは、自分の使い魔が何かやらかしているのかと思い、慌てて騒動の渦中に駆け寄った。

喧噪の所為か、ルイズの声が聞こえていないようで、志貴は呼びかけに応えず顔を、おそらくもう一人の当事者であろう金髪の、キザっぽい少年に向けていた。

包帯をとっていない志貴の表情も、何となくルイズには読み取れた。先程聴こえた声色からの予想だが、おそらく気を立てているのだろう。

「こら、ホウタイ！！　あんた、何やってんのよ！！」

「ああ、ルイズ。どうしたんだい？　っていうかホウタイって俺のこと？」

近寄ってからもう一度、ルイズが呼びかけると、志貴は先程とは違う嫌の取れた声で、口元を綻ばせて返す。

ルイズは志貴の呼び方については無視して、勢い良く彼の胸倉を掴みかかった。

「『どうしたんだい？』じゃないわよ！　あんた、決闘ってどういうことよ！？」

「どうって……決闘することになったんだけど」

「その理由を訊いてんでしょ！！」

「それについてはボクが説明しよう」
困っている志貴に変わり、彼と言い合っていた金髪の少年が言った。
「ギーシュ、あんた人の使い魔と何決闘なんてしようとしてんのよ」
「彼はこの僕を侮辱したのさ。これは我がグラモン家、ひいては貴族そのものの侮辱に等しい」
ギーシュの発言に、ルイズは目を丸くして志貴を見つめた。
「あ、あんたそんなことしたの！？」
「いや、俺はあいつが二股してたところに出くわして、謝るようにいったんだよ。そしたら今度はルイズをバカにするからさ。だからちょっと、頭に来て」
「はあ！？　そんな不敬、許されると思ってるの！？　今すぐ頭を下げなさい、そしたら……」
「無駄だよ」
焦るルイズの言葉を遮るように、ギーシュが不敵に切り捨てた。
「だ、大体あんたもあんたよ！！　決闘は禁じられている筈でしょ！？」
「禁じられているのは生徒同士の決闘だ。彼は生徒ではなく、ただの平民。さらに言えば君の使い魔だ。使い魔との決闘は禁じられていないだろう？」
「そんな屁理屈……！！」
「いいんだ」
必死に決闘をと取りやめようとするルイズの肩を叩き、志貴は首

を振った。

「いいって……、あんた分かってないでしょ！？　武器もないのに、いや、あったとしても平民が貴族に勝てるわけないでしょ！？」

「勝てないからと言って、引き下がれないよ。あの子は間違ってる。それを分からせてあげなきゃいけないんだ。それに……」

志貴は言いながら、自分の服のポケットをがさごそとまさぐり、何かを取り出す。その手に持っていたのは、

「武器ならあるよ。あまり使いたくないけどね」

小さな、ルイズの杖よりも短い、棒きれだった。

「……は？」

「広場はこっちだ。ついて来ると良い」

「分かった」

志貴はギーシュについて、決闘場に赴いていった。

「……あ、待ちなさいこらホウタイ！！」

暫し開いた口を塞げられず呆然としていたルイズは、既に誰もいなくなった食堂を後にし、志貴を追った。

「諸君、決闘だ！！」

ギーシュは舞台俳優のように高らかに声を上げて、広場に集まっ

たギャラリーを呻り、それに応えるかのように歓声が上がる。
……完全に見せ物だな。
周りから受ける好機の眼、眼、眼。
動じてこそいないが、大量の視線がイタい。ここに来る前（つまり記憶に無い時期）にこう言った経験はなかったのかもしれないな、と志貴は何気なく思った。思わず溜息が漏れる。

「ちょっと、あんた」

そこで、志貴は後ろ袖を引っ張られた。
振り向くと、ルイズが志貴を不安げに睨みつけていた。人込みを急いでかき分けて来たためか、若干衣服に皺が寄っている。髪の毛もぐちゃぐちゃだった。

「ルイズ」
「今からでも遅くはないわ。早くギーシュに謝りなさい」
「いや、遅いと思うけど……」

志貴は多少困ったようにそう言うが、ルイズは引き下がらず続けた。

「それにあんた、ギーシュの二股を咎めたからこんなことになったって……、そんなのあいつの問題じゃない。何であんたが……」
「確かにきっかけはそうだけど、理由としては一つ足りないよ」

ルイズの言葉を遮り、志貴は窘めるように彼女に言った。

「何よ、一つって」
「彼は、ルイズの悪口も言ったからね」
「えっ……」

「そこまでだよ」

予想外の言葉に戸惑うルイズの前に、ギーシュが造花の杖を突き出してそういった。

「観客を待たせている。始めようじゃないか」

「勝手に話を進めるんじゃないわよ！！」

「ルイズは下がっていたまえ。巻き添えにあっても知らないぞ」

ギーシュはそういって、杖を一振り。造花の花びらが、ひらりひらりと地面に向けて落ち始める。

「ちなみに、僕はメイジだ。魔法を使って戦わせてもらうよ」

花びらが地面につく前に、ギーリュが何か呟くのが、志貴には聴こえた。そしてそれが唱え終わると同時に、花びらが光り始めた。

「わ、すご」

志貴はそんな場違いな簡単な声を上げる。

光る花びらは見る見るうちに姿を変え、鎧を纏った、青い光沢が特徴的な、女性型の金属の像になった。

「僕の名はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は『青銅』。君の相手は、この青銅の『ワルキューレ』でさせてもらおう」

ギーシュが言い終えると同時に、『ワルキューレ』と呼ばれた銅像は、一直線に志貴へと移動を始めた。

「！」

「きゃ！？」

志貴はその初動のみで銅像の素早さを感知し、直ぐさまルイズを抱えてギャラリーの方へ移動した。一瞬で。

抱え込まれたルイズは悲鳴を上げるが、志貴に降ろされると、キッと彼の方を睨んだ。

「ルイズ、危ないからここにいるんだ」

「あんたの方が危ないじゃない！！　すぐにこんな決闘やめなさいよ！！」

「大丈夫。心配しないで」

志貴はそういってギーシュの方へ向きなおる。

ギーシュは気障ったらしいポーズで傍らにワルキューレを携え、余裕の表情でいた。

「ご主人様との別れはすんだかい？」

「待っててくれたのか？　随分と余裕だな」

朗らかに問いかける志貴に、ギーシュは不敵な笑みでもって返した。

「不意打ちなど、貴族のすることじゃない」

「へえ」

「では、行け！！　ワルキューレ！！」

そしてギーシュの号令とともに、ワルキューレは突進する。

先程より、速く。

「わっ！？」

その速度が予想外だったのか、志貴はワルキューレの剣撃を慌てて回避する。
ドゴォン、という巨大な音とともに、地面が凹んだ。
「すっごいなぁ」
間一髪、紙一重で避けた志貴はその威力に思わずそう漏らした。
「ははは、後悔してももう遅い！！」
避ける。
後方で高笑いしているギーシュを観察しながら、志貴はこの状況を打破する術を模索していた。
避ける。
ワルキューレは攻撃の手を休めない。武器はポケットにあるもののあまり使う気には慣れないため、できれば一瞬で敗北宣言をさせるのが望ましい。
避ける。
ルイズは全ての攻撃をギリギリで避ける志貴を歯がゆい想いをしながら見ていた。
避ける。
ギャラリーの殆どがその光景を見ながら、ギーシュの勝ちを全く疑わなかった。
避ける。
……果たして、この中に。
避ける。
「ねえ、タバサ」
「……何」

「あれって、もしかして」
「……多分、わざと」

この中に、志貴が「なんとかギリギリで避けている」のではなく、「優雅に無駄なく避けている」ことに気付けたものが、何人いただろうか。

志貴はギーシュの余裕綽々な態度に、一つの仮説とそれに基づく策を思いついた。

「こら！！　心配するなとか言っといて、ギリギリじゃない！！　早く降参して決闘をやめなさい！！」

そしてルイズの声が聞こえ、志貴は内心こう思った。
ナイスタイミング。

「いや、案外大丈夫そうだよ。大した事ない。これがあと二、三体増えたら、きついかもだけど」

志貴はそういって、ちらりとギーシュを見た。
志貴の言葉を聴いたギーシュは一瞬憤慨したような顔になるが、勝利を確信したかのようにニヤリと笑った。

「なるほど、ならば僕の勝ちだ！！」

ギーシュは造花の杖を振り、さらに花びらを三枚落とす。

『ふはははは！！　フィーーーッッシュ！！』

志貴の耳に何

か聞こえた気がした。

「いけ、ワルキューレ！！」

花びらは光りだし、三体のワルキューレが現れ、計四体、志貴の周りを囲むように

そこに志貴の姿はなかった。

「いない！？　どこに」

「チェック」

志貴が消えたことに気がついたギーシュがあたりを見渡す直前、背後に何かぶつかった。

あわてて振り返ると、志貴が何やら小さい棒切れを突き出して構えていた。

「……ふぅ。俺の勝ちで、良いかな？」

「なっ……」

志貴は浅い溜息のあと、穏やかな口調で尋ねた。

志貴の策とは、こうである。彼はギーシュの余裕は、自分が平民であること意外に明確な裏付けがあるのではと思った。それは即ち、ギーシュの力そのものの余裕。単純に言えば、全力を出していないのだろうと。

だから、例えばこの銅像の数を増やし、一斉に自分に攻撃させるように仕向ければ自分から一瞬でも視線を外すことができるんじゃないか、そしてその一瞬の隙をついて王手を掛けられるんじゃないか、と志貴は考え挑発したのだ。

なお、一瞬で間合いをつめることができるのならぶっちゃけこん

な策は必要ないのだが、それは単にギーシュの力量と慢心を見誤っただけである。
……ともあれ、彼の策は恐ろしいぐらいに上手くハマったのだが、ここで誤算が一つ。

「ふ、ふざけるな！！」
「え？」

というより、志貴が見誤った慢心が原因だが。
ギーシュが負けを認めなかったのだ。

「な、なんで？　背中から一突き、もう終わりだろ？」
「ふ、ふふ、全盲だと思って君を甘く見ていたようだ。すばしっこさだけはしかし、使い魔としてのそれだね」

決着がついたと思った志貴が慌てるも、ギーシュは眼を座らせてせてそう返し、杖を振って花びらを散らす。そこからさらに、三体のワルキューレが出現した。ギーシュは志貴から離れる。

「いや、えっとギーシュ……だっけ？　ちょっと落ち着いて……」
「良かろう。僕も全力を以て君を、完膚なきまでに叩きのめす！！」

ワルキューレの総数、計七体。その全てが志貴めがけて突進して来た。

「わ、ちょ、まっ……」

予想しなかった展開に慌てつつ、志貴はワルキューレの攻撃を回避。

（……やっぱりこれ、使うべきなのかなぁ）

志貴は右手に携えた小さな棒切れを握り、そう考えた。

この棒切れ……否、実はこれ、棒切れではなく鞘に納まったナイフである。そのことは、食堂に行く途中にこれがポケットに入っていたことに気付いた志貴は、直に抜いて確認している。

しかし、志貴はこれを使うのをためらっていた。

理由はこれがナイフだから、というわけではなく……このナイフの「使い方」。

しかしそうも言っていられない。さすがに七対一では分が悪い。

「……やっ！」

志貴はワルキューレの間を器用に抜け出して、広いスペースを確保する。そして一息吐くと、ワルキューレの方へ顔を向ける。

「……頭痛は勘弁してくれよ」

その一言とともに、志貴はおもむろに顔の包帯を取りはじめた。

曝け出した蒼い瞳とともに、

彼の左手のルーンが、輝きはじめた。

第5話（後書き）

ギーシュ篇、次回完結！！笑
終わらせられなかった。実力不足ですみません。

志貴で戦闘映えさせるのって、滅茶苦茶難しいと気付いた。今更だけどw
バトルが地味ですみません。

感想お待ちしてます

第6話（前書き）

はい、遅くなりました。
テスト勉強していたんです、と言訳をさせて下さい。
すいません。

第6話

「むぅ……」

コルベールが持って来た資料を険しい顔で眺めつつ、オスマンは唸った。

「……コルベール君、これが現れたというのかね」
「はい、昨日の使い魔召喚の儀式にて、ミス・ヴァリエールの使い魔に『ガンダールヴ』のルーンを確認しました」
「確かかね？」

老学院長の問いかけに、コルベールは頷いた。

「ふむ、これが事実とするならば……、厄介なことになりかねんのう」

オスマンがやれやれ、と言って溜息をつくと、

「オールド・オスマン！！」
「今度は何じゃい！？」

部屋の扉が再び、勢いよく開いた。その先にいたのは先程退出した筈の、ミス・ロングビルである。

「学院内で、生徒が決闘を！！」
「なんじゃ、子供同士の小競り合いか。誰かの、相手は？」
「一人は、ギーシュ・ド・グラモンです。喧嘩をしかけたのは彼の方からだとか」

「グラモン家のドラ息子か。全くもう、あとで何言われるか分かったもんじゃないのう……。全然関係ない家からまで苦情が来るし……」

学院長はやれやれと溜息をついてみせる。子供同士の喧嘩やら決闘やら、この手の問題は時代や文化が違っても廃れないものかもしれない。所謂、ハルケギニア版モンスターペアレントだ。

「オールド・オスマン、愚痴で話が逸れていますよ」
「すまん。で、もう一人は？」
「それが……」

ミス・ロングビルは一瞬つまる。何か気になることでもあるのだろうか、それでも彼女は続けた。

「平民の少年です。昨日、召喚されたという」

その言葉を訊き、オスマンとコルベールは眼を見開き、互いに顔を見合わせた。

志貴が包帯を取ったことによるギャラリーの反応は三種類だった。

まず、「ギーシュが本気になったのなら、平民が何しても一緒だ」と、高をくくったように見下すように、あくまで茶番を楽しむもの。観客の半分以上がこのスタンスであり、結果など分かり切っていると思いながらも観戦をやめないので、案外ここには娯楽が少ないの

かもしれない。
　そういう目線で見ないギャラリーは「全盲ではなかったのか？」と、訝し気に眼を細める。広場にいる生徒のほとんどが「ルイズの使い魔は全盲」という噂を耳にしていたので、志貴の行為に疑問を抱くのも当然と言えば当然である。
　ギャラリーの大多数はこの二種類の反応に分かれる。斯様な目線の違いは、興味を持ったのが「ギーシュと平民の決闘」であるか「ルイズの全盲の使い魔」であるかの違いであろう。
　そして少数は、志貴が包帯を取ったことによって雰囲気が、というより空気が変わったことを感知し、これからの成り行きを見逃さぬよう気を引き締めた。この広場にいる者の中では、キュルケ、タバサなど少数名、そしてギャラリーでは無いが対峙者のギーシュがこれにあたる。尤もギーシュの場合は「見逃さぬよう」では正しくないが。

（あら、やっぱり良い男）

　包帯をはずした志貴を見て、キュルケはそんな風に思う。

（それに何となくだけど、纏う空気が変わったわね）

　実戦経験こそ無いもののトライアングルメイジとしてそれなりに魔法の実力を持つ彼女は、彼の変化を感じていた。そして早々に戦闘の結果が分かってしまう。

（……ふふ、素敵。胸に火がついちゃいそうだわ）

　「微熱」を二つ名にもち、自称するキュルケの興味は決闘から志貴に移った。

尤も、元々そちらが興味の本命だったのだろうが。
……そして、傍にいる自分の使い魔が怯えていることも、ソレを隠すようにして警戒の姿勢をとっていることも、彼女は気付かない。

（変わった）

キュルケの隣で決闘を見ていたタバサは、親友より明確に志貴の纏う空気を察知した。
祖国でシュヴァリエの称号を持ち、幾度となく、時には彼女にとって理不尽な任務を乗り越えて来た。そんなタバサは、その空気が何であるかを知っていた。
薄く、鈍い……おそらく全く本気でないのだろうが、僅かに冷たく纏ったソレを、タバサは知っていた。

（……彼は、いったい）

その名前を「殺意」と、彼女はそう呼んでいる。

そんなギャラリーの中にもただひとりの例外が存在する。

（あ、なに包帯とってるのよバカホウタイ！？）

志貴の素敵なご主人様、ルイズである。

（昨日あんなに顔色悪くしたのに、わざわざ不利になって何考えてんの！？　あぁ、放り投げちゃった！？）

志貴の善戦には軽く眼を見張ったものの、初めからこの決闘に不

満を露にしていた彼女はずっと気が気で無かった。
下手をすれば殺されてしまうかもしれない。平民の貴族への不敬とは、つまりそうされてもおかしくないことなのだ。ありていに言えば、ルイズは志貴が心配なのである。

（大体あんな小さな……何あれ？　ともかくあんなしょぼいので何ができるってのよ！？）

ルイズは、自分の使い魔の「もう二、三体増えれば危険」という発言はおそらく本当だろうと思っていた。でなければ、あんな風に一瞬の隙を作るために挑発したりしない。もっと強力な力があるならば、ソレで圧倒してしまえば良いのだから。

（しかも棒立ち！？　何ボケっとつったってんのよ！？）

そしてもちろん、公爵家育ちで貴族優位の思想を教育されて来た彼女は、もとより志貴にそんなものを期待したりしない。そういったところは、前述の「観戦を楽しむ」タイプと視線自体は同じである。

（このままじゃ、）

ともあれ、ルイズは気が気で無かった。

（あたしの使い魔が、）

しかしここで、

（無能（ゼロ）じゃない証明が、なくなっちゃう！！）

彼女は、自分の使い魔に対する過小評価を認識する。

「……え？」

どさり、という大きな音が聴こえた直後、そんな当惑の声を上げたのはギーシュである。

ギーシュはもちろんギャラリー全員が、各々の視線の先で起こった出来事に眼を丸くしていた。

「な、何が起こったんだ？」

「ギーシュのワルキューレが突然倒れたぞ？」

ギーシュは包帯を取った志貴に対して警戒を強めながら、まずは一体目を様子見でけしかけてみた。

そして志貴は、向かってくる青銅人形に対して左手を突き出し、持っているナイフを向けた。

それ以上彼は微動だにせず、やがて両者は衝突した。

それだけである。

ただそれだけで、ギーシュがけしかけたワルキューレは人形の呈を成さなくなり、崩れ落ちた。

「な……、何をした！？」

「別に」

やがて崩れた元人形が消え、、それに合わせてギーシュが叫ぶと、志貴はなんでもなさそうにそう呟く。

「ただ単に……殺しただけだよ」

言い終えた瞬間、ギャラリーの眼から志貴が消え――？――ギーシュの二体目のワルキューレが倒れた。

「バカな！？　い、いけ、ワルキュ……！！」

術者は叫ぶも、それは叶わず。
気がつけば7体全てが崩れ落ち、次々と消え去って……彼の首元には、ナイフが添えられていた。
一瞬の出来事。
目の前で行われた神業とすら称せる出来事に、ギーシュはこう言うしか無かった。

「ま、……まいった」

「くっ……」

ギーシュの言葉が聴こえると、志貴は一歩、二歩、三歩と後退し、そのまま右の掌で顔を覆い……片膝をついた。
半ば呆然と魅入っていたルイズは、そんな志貴の所作に我をとり戻す。直ぐさま彼が放り投げた包帯を拾い、彼の傍に近寄った。

「ち、ちょっとあんた、大丈夫なの！？」
「え？　あ、ルイズ……」

見ると、指の隙間から見える顔面は蒼白で、額に僅かな脂汗が見える。瞳の色は相変わらずぞっとするほど冷たく、昨日の包帯を取った直後の姿そのままだった。

いや、下手をするともっと悪いかもしれない。
「ほら、手をどけなさい。包帯巻くから」
「あり、がとう」
志貴はそう返し、素直にルイズに従う。
「は、はは。ホントに、まいった」
ほどなくして包帯を巻き終えると、いつの間にか腰を抜かしていたギーシュが口を開いた。
「何よ、文句でもあるの？」
「いや、そうじゃない。何といえば良いのか、弁明のしようがないくらいに負けたよ。完敗だ」
はは、と妙にあっさりとした笑い声を上げて、立ち上がると、ギーシュは志貴に手を差し出した。
「立てるかい？　すまない、無礼は僕の方だったようだ」
「大丈夫、だよ。それより、謝る相手が、違う」
「ああ、そうだね、そうだったね」
ゆっくり立ち上がる志貴にそう返されて、ギーシュはルイズに顔を向ける。
「ルイズ、今まで君をバカにして来たことを謝罪させてもらう。すまなかったね」
「な、何よいきなり。気持ち悪いわね」
「いや、そういう約束なんでね。それに君の使い魔の実力を知って

しまったのだから、もうバカにはできないさ」

ギーシュの得体の知れない心変わりに、ルイズは若干引きつつ、

「ふ、ふん。あたしの使い魔なんだから、当然よ」

そんな風にふんぞり返る。

「いや、危なかったさ」

志貴はルイズとギーシュに言う。

「え？　圧倒的だったじゃない」

「確かに、何かする暇もなかったよ。何が危なかったんだい？」

志貴の呟きに二人はきょとんとした顔で聞き返すと、志貴は首を振った。

「もう少しで、ギーシュを殺すところだった」

そういって、彼は困ったように笑う。

殺すところだった。

その結末を想像し、ルイズはぞっとした。

「あ、アハハハハ！！　確かに、それは危なかった！！」

しかしギーシュには冗談に聴こえたのだろうか、腹を抱えて笑うだけだった。

……いや、よく見ると笑みが引きつっていることに、ルイズは気付いた。ギーシュ精一杯の強がりなのだろう。

「それじゃあ僕は、モンモランシとケティを捜しにいくよ。二人にも謝らないといけないから」

ギーシュはそれだけ言って爽やかに笑い、広場を去って行った。

晴れ晴れしすぎて気色悪い。

ルイズはそんな風に思う。

（……ていうか、逃げたのかしら？）

その場でギーシュを見送り終え、ルイズが志貴をの法を振り返ると、

いつの間にか現れていたキュルケが、志貴をバカでかい二つの何かで窒息させていた。

「……勝ってしまいましたね」

「……いや、圧倒してしまったの」

オスマンとコルベールは志貴とギーシュの決闘を見終わると、そう呟いた。

ミス・ロングビルはいない。オスマンの指示により、再び学院長室を退出させられていた。

「どう見る、コルベール君」

「早業過ぎて何とも……、少なくとも、最小労力でゴーレムを倒す

術を持っている、としか。でなければ、スピードはともかく倒す時にもっと派手になってしまいます」
「……あるいは、ゴーレムではなく魔法そのものを消したのやも知れん」
「！？　だとすれば、それはメイジの天敵となるのでは！？」

二人は同時に息をのんだ。

「やはり、ガンダールヴ……」

コルベールはぽつりと呟く。

「コルベール君、その考えは性急じゃ」
「しかし」
「文献によれば、ガンダールヴはありとあらゆる武器を使いこなす使い魔だったとか。確かに武器らしきものは使っておったが、それだけではあの技能の説明がつかん」
「それは、彼が研鑽したものでは……」
「それを見極めることが、必要なのじゃ。じゃからコルベール君、王室にも彼のことは秘匿としておくように」

考えていたことを先読みされ、コルベールは困った顔でしかし頷く。

「それにしても、なんじゃ」
「はい」

そういって、オスマンは盛大に溜息をついた。

「厄介なことになりそうじゃのう……」

決闘後のごたごたは簡単に説明するとこうなる。
まず、決闘の勝者をキュルケが無自覚に殺害しそうになっていたところをルイズが引きはがし、志貴は天国から現実に戻るとともに九死に一生を得る。ルイズがキュルケを威嚇すると「なぁに嫉妬？」と言わんばかり（というか言ってた）に志貴を殺しかけたルイズより数ランク上のそれを、ゆっさゆっさと振わせ挑発。
ルイズ、吠える。
ルイズとキュルケのじゃれ合いが終わると今度は観戦していた生徒が突然「認めない！！」とかなんとか言い出して志貴に決闘を申し込む。もちろん志貴は疲弊しているので、そんなことできる筈も無い。また、それと平行してルイズは「あなたの使い魔凄いわね」だの賞賛の言葉を受ける。今まで褒められたことが殆どない彼女は戸惑い赤面した。
これ以上の決闘など認められない（という半分の心配と半分の口実）ので赤面しながらも志貴の手首をむんずと掴み、急いで広場を後にした。

そして、夜。
キィ、という小さな音で目が覚めた。

「……ぅん？」

ルイズがそんな声を漏らしながら起き上がる直前小さくパタン、という音が聴こえた。
目を擦りながらあたりを見渡す。くらいので明かりをつけると、

志貴がいないことに気付いた。

「……あれ？」

包帯が放置されている。

「……！？」

その事実に一気に目が覚めた彼女は包帯を鷲掴み、すぐに上着を羽織って部屋を出た。

幸い、志貴はすぐに見つかった。

部屋を出て階段を下りると志貴の後ろ姿が見える。どうやら、外に向かうようだった。

「……何しにいくのかしら」

このまま引き止めることも可能だが、目的が気になるのでルイズは彼のあとをこっそりとつけることにした。

「月が二つ……とんでもないところに来たな、俺は」

夜空を見上げながら、志貴はそんなことを呟いていた。

そして何がおかしいのか、くすくすと笑っている。

（……二つの月がどうかしたのかしら）

つられて夜空を見上げる。確かに二つの月や星がよく見えて、綺

麗な夜空だ。しかし、おかしいところはどこにも無い。

「しかし、良い風と夜空だ。心地よくて、酔ってしまいそうな」

視線を戻すと志貴はまた何か呟き、体の向きをルイズの方へと向けた。

「なあ、あんたもそう思うだろ？」

気付かれたと思ったのかルイズは咄嗟に体を隠す。そして恐る恐るもう一度覗いてみると、自分に言っていたのではないらしいことが分かった。

志貴の視線の先には、誰かいる。

ルイズよりさらに上背のない、髪の短い、持つ主の上背より長い杖を持った、長いマントの人物。

「あれ、まさか……」

彼女の予想通りなら、ルイズはその人物を知っていた。よく自分の仇敵の傍にいる、寡黙な女の子のことを。

「タバサ？」

第6話（後書き）

ザ・瞬殺。

志貴の戦闘って一瞬で終わる方が映える気がしたんで。
というかルーンの助力がついたら、志貴ならこんなもんじゃないでしょうか？
そう信じたいです。

感想くださった方、ありがとうございます。
投稿したらすぐに返事を書かせていただきますので、失礼をお許し下さい。
引き続き、感想お待ちしております。

もう少し筆が速くなりたいw

第7話（前書き）

前回投稿から半月という（自分にとって）脅威のスピードで投稿させていただきます。

第7話

ルイズが隠れて志貴と突然現れたタバサの様子を見ていると、急に風が強くなり、途端、声が聞こえにくくなった。

「……もう、なんなのよ？」

そんな愚痴を叩きながら、彼らの声に耳を傾けた。すると、

「……月……女神。……女性……を、活性化……」

「……へ？」

本来ならこの程度の言葉では何を言っているか分からないだろう。しかし、深夜の男女の密会ということが手伝ってか、はたまたルイズの妄想がたくましすぎるからなのか、

（……こ、これってまさか、求愛の言葉？）

そんなことを思ってしまったり。

ともあれルイズが頬を真っ赤にしながら耳をさらにそばだてると、とんでもない言葉が聴こえて来た。

風は、早々にやんでいた。

「男と女が求め合うのに、互いの素性が必要か？」

（は、はぁぁぁぁぁ！！？？）

求め合う？　求め合うってどういうこと！？
つまり、あのその、そういう！？
ししししかも、アタシより小さい娘を！！？
「できればもう少し成熟してほしいが、素養は十分にある。求めて来るなら、俺は拒まない」
素養！？　素養って何！？　求めて来るって、タバサから！？
なんなのよなんなのよ、キュルケのときは靡かなかったからちょっと安心してたのに、そういう趣味だったの！！？
「熱く激しく、求め合おうぜ……！！」
その言葉を聞いた瞬間。
ルイズの中で、何かが切れた。
「アアアアンタ、ナナナナナナニ言ってんのよーーーーーーーーーー！！！！！？？？？？」

「なあ、あんたもそう思うだろ？」
星明かりに照らされた志貴を、タバサは無言で見つめていた。
「そこまで詳しいわけじゃあ無いが、ギリシャ神話では月を司るのは女神だから、月は女性の魔力を活性化させるんだってな」
「……？」

突然意味不明なことを言われるも、その程度でタバサは気を緩めたりはしない。多少気になるが、むしろ彼女は警戒を強めた。
そう。彼女は警戒していた。

「訳分からない、というより聞く耳持たないって顔してるな。まあ今のはどうでもいいといえばどうでもいい話だ」

クックックッ、と芝居がかった笑みを浮かべる。
妙だ。
昼間はもちろん、決闘のときともまた雰囲気が違う。

「あなた、何者？」

タバサは杖を握りしめ、訊いた。
ニィ、と。
志貴は嗤う。

「それを知る、意味はあるのか？」
「……？」
「男と女が求め合うのに、互いの素性が必要か？」
「……！！」

背筋が凍り付きそうなほどの悪寒を感じ、咄嗟にタバサは志貴から距離をとった。

「できればもう少し成熟してほしいが、素養は十分にある。求めて来るなら、俺は拒まない」

両腕を広げて自分を見つめる彼の瞳は、昼間のそれとは比べ物に

ならない殺気を内包している。
タバサは、それを直感して杖を構えた。
その所作を確認した彼はポケットをまさぐり、決闘の際に用いた、タバサが初めて見る作りのナイフ（と思われる。彼女には断定できないが）を取り出した。

「……それは、杖？」
「さあな」
「……あなた、メイジ？」
「野暮なこと訊くなよ」

何が野暮なのか、とタバサは問う。しかし志貴はクックッと笑い、

「問答はいい。熱く激しく、求め合おうぜ……！！」

「アアアアンタ、ナナナナナナニ言ってんのよーーーーーーーーー！！！！？？？？？」

果たして、ルイズはそんなことを叫びながら現れた。

「やぁ、麗しのご主人サマ。夜分のご機嫌はいかがかな？」
「……」
「『いかがかな？』じゃないわよ！！　あんた勝手に包帯とって、こんな夜中にナニやってんのよ！？」
「ナニって……」

志貴はタバサを見て、ルイズを見て、

「真夜中の逢瀬以外の、何に見える？」
「それ以外の何かに見えたかったわよエロホウタイ！！！！」

ルイズの蹴りをかわす。

「よ、避けたわね！？」
「あんまり体は強い方じゃないんでね」

志貴がナイフを閉まってポケットにつっこむと、ルイズはタバサを睨んだ。

「大体あんたも、人の使い魔にナニ色目使ってんのよ！？」
「おいおい、キュルケ以外には何も言わないんじゃなかったのか？」
「黙れエロ犬！！　ヘンタイホウタイ！！」
「語呂が悪いな」
「……違う」

騒がしいルイズと芝居がかった志貴を冷めた眼で見つつ、タバサは呟いた。

「ナニが違うのよ！？」
「あなたが思っているようなことは、何も無い」
「シラを切るつもり！？」
「まぁまぁ、ご主人サマ。俺はただ、彼女の熱い視線に誘われただけだよ」
「ほら！！」
「……ものは言い様」

タバサは溜息を吐き、軽く志貴を睨んだところで、気付いた。
あれほど冷たく鋭かった殺気が、いつの間にかなくなっている。

彼の雰囲気そのものは特に変化した様子はない。殺意だけが、もの見事に掻き消えていた。
ルイズが現れたからだろうか？
ともあれこの雰囲気なら訊けるかもしれないと思い、もう一度、タバサは尋ねる。

「……あなた、何者？」

その言葉に、志貴は再び戯けたようなくぐもった笑いを見せる。
挑発的だ。
やはり、昼間の彼と同一人物とは思えない。もちろん他の人の前では隠していただけという可能性もあるが、それにしたって不自然すぎる。
その違和感を感じたのはタバサだけではなかったようで、やはりルイズも彼の様子に戸惑いを見せていた。
というか、気付くのが遅い……などと、タバサは内心で呟く。

「ね、ねぇ」
「どうした、マイ・マスター？」
「あんた……本当に、トーノシキ？」
「発音が違うな。遠野志貴、ちなみに言ってなかったが遠野がファミリーネームだ」

その言葉にタバサは眉をひそめた。
ファミリーネーム？
それはつまり彼が、或いは一族が土地を所有している、もしくは称号を持っているということだろうか。
もしそうなら、彼が貴族である可能性が浮上して来る。
見たことの無い素材の服、初めて見る作りのナイフ（？）、滅多に見ない黄色の肌（少し青白いが）。

トーノという領地も貴族も聞いたことが無い。ならばもしかしたら、彼は東方から召喚された貴族なのかもしれない。
だとすれば、それはそのまま、彼がメイジである可能性にもなる。
もちろん偽名である可能性も否定せず、タバサは彼の観察を続ける。

「じゃあ、シキ。あなた、昼間とは随分と雰囲気が違うけれど……それは何故？」

そのように複雑な思案を巡らせるタバサの気も知らず、恐る恐る、ルイズは志貴に尋ねた。
対して志貴は、やれやれと言わんばかりに肩を竦める。

「まあ、そうだな。昼間とは、ある意味別人だからな」
「別人？」
「……ある意味？」

ルイズ、タバサが順に疑問を声に出す。

「ルイズ、あんたには言ったが俺は記憶が無い。だから詳しいことは分からないんだが」

そんな二人の様子に志貴はそんな前置きをして、

「どうやら俺は、二重人格って奴らしい」

と、言った。

「にじゅう？」
「人格？」
「……あんたら、仲いいのか？」

二人は同時に首を横に振る。
律儀だ。
というか息がぴったりすぎだった。

「俺も詳しくはない。呼び方も俗称で、正式には「解離性同一性障碍」とか言う病気らしいが、なんでも一つの体に複数の人格ができる症状……だそうだ。やはり知らないみたいだな」
「初めて聞いたわよ、そんな病気」
「だろうな」
「じゃあ、あんたはその複数の人格の中の一人ってこと？　昼間のとは違う」
「理解が早いね。その認識で十分だ」
（おかしい）

タバサは思った。
記憶がない、と彼は言った。しかし彼の挙動は見識ある人間のそれだ。記憶が無いというのなら頭の中はまっさらな筈なのに、とてもそうは思えない。何故そんな、私たちの知らないことを知っている？
しかも彼の物言いは、まるで自分たちが知らないのを初めから分かっていたような……

「けど、何でそんなこと知ってるの？　あんた記憶が無いって言ってたし、今さっきも言ったじゃない」
「オイオイ、記憶喪失で頭がまっさらな状態になったら、そもそも会話なんてできないじゃないか」

ルイズの問いかけを、志貴は鼻で笑った。
「どうやら俺の喪失した『記憶』ってのは、俺の素性に限定されるらしい。過去、或いは思い出がなくなったのかもな。そう考えると、なかなかロマンティックじゃないか」
「……どこがよ」
ルイズは志貴の台詞に呆れているが、タバサにはようやく合点がいった。確かに「全て」忘れたとは言っていない。
「さて、さっきからそこのお嬢さんが聞きたがっていた『俺が何者か』の答えだが」
志貴は戯けた態度をやめて、タバサに視線を移す。
突然話を戻され、タバサは一瞬だけ体が強張った。
「さっき言った理由で推測になるけど、いいかな？」
「かまわない」
タバサが頷くと、志貴は笑った。
昼間とは違う、随分邪悪な笑顔ね……と、ルイズがぼんやり思っていると、志貴が
「どうやら俺は、別の世界から来たらしい」
と、言った。

「べつの？」
「世界？」
「……仲いいだろ、あんたら」

二人は同時に首を横に振る。
律儀だ。
というか息がぴったりすぎだった。
二度目の二人のそんな所作に、志貴は笑っていた。

「何よ別の世界って、訳分かんない」
「まあ、無理に分かる必要は無いけどな。人間ってのは、理解の範疇を越えた概念を無理に理解しようとすると、脳が壊れるらしいからな」
「突拍子の無い話ってのは認めるわ」
「それに別の世界ってのは単なる比喩だ。ここと違う星の人間かも知れないし、誰かの夢の世界に俺が迷い込んだのかもしれない」
「ますます訳が分からないわ」
「……根拠は？」
「ないね。強いて言えば、俺の知識と、ここ、ハルケギニア……だっけか？　の一般常識が違いすぎる。それがこの推測の根拠だ」
「たとえば？」

その知識の違いを示せとタバサが促すと、志貴は「そうだな……」と言って暫し考え込み、空を見上げた。

「じゃあ訊くが、夜空に浮かぶ一際目立つ二つの星。あれは『月』か？」
「は？」

そんな呆れたような声を上げたのはルイズである。

「何言ってんの？　当たり前じゃない」
「ああ、俺はあんたたちにとって至極当然であろうことを訊いてる。重ねて訊くが“二つとも”『月』なんだな？」

今度はタバサが、訝し気に頷いた。

「それが、違い？」
「ああ」
「どういうこと？」
「俺の知識では、月は一つ。いや、そもそも『月』は地球の周囲を回る衛星の名称だから、俺からしてみれば『月が二つ』という言葉自体がおかしいんだ」

と、そこまで言ったところで志貴は「あっ」と呟き、何か思いついたかの様にポケットをまさぐりはじめた。
その所作に、タバサは杖を構える。

「警戒するなよ」

肩を竦めながら志貴が取り出したのは、さっき彼がタバサと対峙した時に構えていた得物だった。

「これが何と読むか分かるかい？」

柄の部分を指差し、志貴はそんなことを訊いて来る。
顔を近付けて繁々とそれを眺めた二人は、やがて首を横に振った。

「いいえ」
「というか、これ文字なの？」

「これは七夜（ななや）と読むんだ」
「ナナヤ？」
「ああ」

そう言って、志貴は得物をしまう。

「……やっぱり、違う世界なんて信じられないわ。そんな変な模様見せられて『文字』だとか、月が一つとか。１００歩譲ってにじゅう人格とかっていうのは信じても」
「信じてくれなくてもいいさ、頭の片隅においておく程度で。もしかしたら重要な場面で得をするかもしれない」
「何よ、得って」
「俺の素性の手がかりになるかもしれないし、俺が召喚された理由の手がかりになるかもしれない。平民が召喚されるってのは、前代未聞なんだろ？」
「確かに……」

ルイズは納得したのか、神妙な顔で頷いた。
一方でタバサは無表情だ。しかし志貴が手ぶらになったのを確認し、少しだけ警戒を解いていた。

「質問の答えはこれでいいかい？」
「……十分」

志貴が確認をとると、タバサはそう言って頷き……ルイズがゆっくり、口を開いた。

「……それで、あんたは」
「ん？」
「違う世界だかなんだか知らないけど、家に帰りたいとか、言わな

いわよね」

志貴を睨むルイズの眼差しには、僅かな怯えが混じっていた。
ルイズにとって志貴が使い魔でいることは、ある意味生命線だ。
自分がメイジであることはもちろん、自分が無能でないことの証明なのだから。
それが死んでしまうなどといった理由ならまだしも、「家に帰りたい」などという理由でいなくなられたら、使い魔に裏切られたメイジとして汚名を被ることになる。
それは、使い魔召喚で得られた自信がそのまま壊れるというだ。
ルイズははっきりと理解しているわけではないが、そんな不安が漠然と脳裏を過った。

「別に？」

そんなルイズを見て、志貴は笑って答えた。

「ならいいけど……、記憶が無いし素性も分からないのよ？」
「だからさ」
「どうして？」
「俺は今のところ、自分の過去には興味ない。それに、使い魔をやってる限り最低限生きることには苦労しなさそうだ」

志貴の答えにルイズは顔をきょとんとさせた。
拍子抜けするほど簡単な理由だ。昼間の性格もあんなだし、根が楽天家なのだろうか。
そう思って安堵したのだろうか、ルイズを急な眠気が襲って、彼女は大きな欠伸をした。
「ご主人サマ。淑女（レディ）がはしたないぜ」

「う、うるさいわね。誰のせいでこんな真夜中に起きたと思ってんのよ」
「俺が心配だったのか？」
「ち、ちがうわよ！！」

志貴はルイズをからかい終えると、タバサを見た。

「そう言うわけで、俺達はもう戻るよ」

タバサは志貴の言葉に無言で頷く。
そして、ルイズと志貴はタバサに背を向けて、広場を後にした。

「そういえばあんた、これ」

ルイズは歩きながら、ポケットから志貴の包帯を取り出した。

「ああ、ありがとう」
「あとで自分で巻いときなさいよ。そう言えば結局訊きそびれたけど、あんたどうして包帯とってたの？」
「ダンスをうまく踊るためさ。尤も、興が削がれてしまったがね」
「はぁ？」

意味が分からず志貴を見ると、彼は笑っていた。

「からかってんの？」
「いや？　さっきも言ったろう、理解できないことは無理に理解しちゃいけないのさ」

「何か調子狂うわね……」

ルイズは腕を組んで考え込む。そして、志貴がさっき言っていた言葉を思い出した。

「そうね、あんたさっき昼間とはある意味別人って言ってたわね」

「それが？」

「じゃあ、あんたは今日からナナヤ。昼間の方はシキ。そう呼ぶわ」

そうだ、昼間と同じ人物だと思うから調子が狂うのだ。この役者臭い仕草が目立つ方と、昼間のお気楽能天気包帯を分けて考えればいい。

「好きにしたらいいさ」

ルイズは名案だと言わんばかりにそう指差すと、志貴改めナナヤは肩を竦めてそう返した。

「……はぐらかされた」

広場で一人、無感情に、タバサはそう呟いた。

ルイズは気付いていないようだが、タバサはそこまで抜けていない。

タバサは気付いていた。

彼は何一つ、核心を喋っていないことを。

自分に記憶が無いこと、それを抜きにしても。

彼が喋った事は全て、彼にとってどうでもいいことなのだと。

……そう。

自分の今置かれた状況すらも、だ。

第7話（後書き）

……なんかナナヤ、ちがくね？　と思ってみたり
今までで一番キャラが外れてる気がしますが、大丈夫かなぁ……

「月」についてですが、「タイタンは木星の月」などと表現するように、広義的は衛星をさします。だから「月が二つ」というのも間違った表現じゃないんですね、最近にになって気付きましたw
けど作中のように言及させた方が後々面白くできそうなのでこのままです。
という言訳を今ここでしておきますw

タバサがデレるのはまだ先だそうですよw

第8話（前書き）

お久しぶりですいません。
就活の隙を見て投稿です。
内定欲しい。

第8話

「ランランララン、ランラララ～ン♪」

朝も早くからそんなメロディーを口ずさみながら、トリステイン魔法学園に勤めるメイドの少女シエスタは洗濯仕事に励んでいた。

彼女は仕事柄、普段から早起きである。今日もいつも通りの時間に起きて窓を開けてみたところ、雲一つない空が目にとまり、それが絶好の洗濯日和だと直感し、急いで着替えて仕事を開始した次第である。

そして多分、その直感は当たる。

「ランラララ、ララララランララ～ン♪」

だって、空は快晴。風がこんなに気持ちいい。

今日は素敵な1日になりそうな予感。

彼女はそんな風に思いながら、大きく伸びをした。

「ん、しょ、……っと」

丁度そんな時、シエスタは一人の青年が、自分と同じ事情だろうか衣類を両手に抱えてやって来た事に気がついた。

数日前に知り合った、とある貴族の使い魔となった彼。

「あ、シキさん。おはようございます」

「やあシエスタ、おはよう」

世にも珍しい人の身なりをした使い魔、遠野志貴は朗らかに笑いかけるメイドに挨拶を返した。

「シキさんも、お洗濯ですか？」
「まあね。今日は晴れそうだし」

女性ものの衣類（おそらくご主人様のであろう、ブラウスや下着）の入った籠を一旦置いて、志貴は体を伸ばす。そんな彼の姿を見ながら、シエスタはクスッと笑った。

「手伝います。私の分は、もう終わりましたから」
「いいの？」
「ハイ。その方が早く終わりますよ」
「ありがとう」

ギーシュとの決闘以来、シエスタは志貴の事を特別な目で見るようになっていた。
それは志貴が平民でありながら貴族を圧倒した事によって、自分もやればできるんだ、と勇気をもらった事が主な要因。
と、彼女自身はそう思っている。彼女だけでなく学園のコックたちもこれを理由に、志貴の事を「我らの剣」などと呼んでいる。
しかし、理由はそれだけではない。というのも、決闘騒動の発端に彼女が僅かながら関わっていたからだ。

ここで、志貴とギーシュの決闘発端となったやり取りを、おおまかに記そう。
志貴がシエスタと初めて出会って、挨拶を交わして別れた直後に、彼は談笑をしている少年たちの足下に小さな瓶が転がっているのを見つけた。志貴はそれを拾い上げると、少年の集団に「これ、君たちのじゃない？」と尋ねると、その中の一人の、金髪のきざったらしい少年が短く「違う」と返した。
志貴はそこで追求したりしない。「そう」問いって踵を返し少年

たちからはなれると、丁度シエスタがやって来た。なので彼女に小瓶を渡し、落ちていた場所を教えると、「おそらくミスタ・グラモンのものです」と、言うが早いか小瓶を少年集団のところへ持っていった。このため志貴は、彼らに否定されたのをシエスタに言いそびれてしまっていた。

そしてまた金髪の少年（ギーシュ）がシエスタを突っぱねると、周りが「おいそれ香水じゃないか」と囃しだし、……そして志貴が説明したように、二股騒動へと発展。女の子が二人（初めに現れて泣きながら去っていったのがどうやら後輩で、続いて現れるなり激怒して帰っていったのは彼の同級生のようだ）去ったあとに、

「やれやれ、レディたちにはバラの花の何たるかが、分からなかったようだね」

などと言うものだから、志貴は噴き出してしまった。

あとは、彼の証言どおりである。

もしかすると、志貴があのタイミングで割って入ってこなければ、シエスタは酷いことを言われたかもしれない。どんなに理不尽でも、それが平民というものだからだ。なので図らずとも志貴はシエスタを助けた事になる。

いや、あるいは意図的なのかもしれないが、シエスタは志貴にそのことを尋ねたりはしなかった。

ともあれそんな理由で、シエスタは志貴の事を尊敬し、また特別気にするようになった。

「ありがとうシエスタ、助かったよ」

「どういたしまして」

他愛ない話をしながら、洗濯はいつもより早く終わった。
「今日はホントに、雲一つないなぁ」
「そうですね、絶好の洗濯日和。良い『虚無の曜日』になりそうです」

そういいながら二人は揃って空を仰いだ。
「虚無の曜日」とは、数日ごとに訪れる休日の事である。授業も休み。ルイズに聞いた話では「始祖ブリミルが云々～」ということで半分もその意義が理解できなかったが、要するに日曜日みたいなものか、と志貴は解釈していた。
つまり、今日は休日である。

「それでシキさんは、今日はどのように過ごすんですか？」
「俺？　俺はね」
「シキ！」

シエスタの問いに答える途中、背後からの声に遮られ、志貴は言葉を一旦止めた。
そして振り向くと、桃色がかったブロンド髪の少女が、腕を組んで仁王立ちしていた。
「洗濯が終わったのならすぐに支度！　街に出るわよ！！」
そして少女は杖で志貴を差し、よく通る声でそう言った。
差された志貴はシエスタと顔を見合わせ、肩を竦めた。
「まあ、ご主人様次第さ」
少女の名前はルイズ。

使い魔たる遠野志貴の、可愛い可愛いご主人様だ。

「タバサぁ～」

甘えるような声で親友が突然部屋に入って来ても、タバサは黙々と読書を続けていた。

そんなタバサの態度にもなれているのか、キュルケは愚痴でも訊いてほしいように彼女に近づく。

「昨日ね、ダーリンを部屋に招待するためにフレイムをルイズの部屋に遣わせたの。なのに部屋にはダーリンもそれどころかルイズもいなかったの。これってどういう事だと思う！？」

「……」

そんな風に早口でまくしたてても、キュルケの台詞は右耳から左耳へ通過するだけ。タバサはゆっくりページをめくった。

ちなみにキュルケがフレイムをけしかけた時にルイズとダーリン（志貴のことを、キュルケは何故かこう呼ぶようになった）が何をしていたのかは、既に語られている通り。なのでタバサも多分に関係しているのだが、もちろんそんな様子はおくびにも出さず、ただただ手に持つハードカバーの本を耽読していた。

大したタマである。

「でね、さっきフレイムが聞いたんだけど」

しかしさすがにめげないキュルケに呆れたのか、或いはただ何と

なくなのか、タバサはぼんやりと窓の外に視線を送り、
「ルイズとダーリン、今日は街に出かけるって。だから」
たまたま見かけたその光景に、目が止まる。
「あなたのシルフィードに、乗っけてくんない？　ちょっと、後をつけてみたいのよ」
そしてそんなキュルケの台詞と、タバサが本を閉じたのと、どちらが早かったのか。
タバサは窓を開けると、彼女の使い魔である風竜・シルフィードが、どこからともなく飛んで来た。
「乗って」
「さっすがタバサ！　あたしの親友！」
キュルケとタバサは、いつもこんな感じの親友同士である。

「いたたたた……」
街の大通りの入り口で、志貴はやや前屈気味に腰に手の甲を当てて、困ったようにそう呟いた。
「まさか、馬に乗れないとは思わなかったわ……」

そんな端から見ればやや情けない志貴を横目に、ルイズは呆れ気味だ。
それもそのはず、彼女は志貴が馬に乗れると思っていた。だが実際乗せてみると、馬が前足を高く挙げただけであっさり落ちてしまったものだから、がっかりである。時間がないので乗り方を教えるわけにもいかず、ルイズは自分の乗る馬に志貴も乗せ、街まで来た。この時身長の関係上ルイズの後ろに志貴が乗ることとなり、志貴の腕は彼女の腰に回されたのだが、今でも少し胸がドキドキしているのはそのせいである。
ともあれ、ギーシュとの決闘での動きを見れば、彼女がそんな風に勘違いするのもムリはなかったのかもしれない。

「バイクなら乗れると思うんだけど……」
「ばいく？」
「いや、乗馬の経験はなかったみたいだ」
「あんな凄い動きができるのに……、あんたってホント謎だわ」
「面目ない」

志貴は腰を数回叩いた後、上半身をぐるりと旋回させる。

「で、何やってんの？」
「整理体操」
「あ、そ。よくわからないけどさっさと終わらせなさい」
「ん。……よっと」

最後に大きく背伸びをして、背筋を整えると志貴はルイズに尋ねる。

「で、今日は何しにここに？」
「言ってなかったっけ？　今日はあんたの、生活用品とか色々買う

ために来たのよ」
「あ、そうなんだ。ありがと」
何気なくお礼の言葉を挟んで微笑む（目元が見えなくとも口元だけで何となくだが分かって来たらしい）志貴を見て、ルイズは不意を討たれたように頬を染め、急いで顔を背けた。
「べ、べつに、メイジとして当たり前のことをしてるだけよ」
そして照れ隠しの建前を述べて、
「後、剣ね」
「剣？」
「そ。シキあんた、あんなしょぼいナイフだけじゃ心もとないでしょ？　だからご主人様のあたしが、上等なのを見繕ってあげる」
ルイズはそう続けた後、胸を張った。
もちろん、ルイズに剣の善し悪しなど分かる筈もない。鑑賞するという観点から見ればそこは公爵家の娘、審美眼は確かなものだが、見ただけしっかりした作りだとか切れ味が良いとか、そういったことは判別つかない。なのに自信満々である。
その理由は「高くて綺麗なら多分良い剣でしょ」という単純明快な思考もあるが、それ以上にギーシュとの決闘での志貴のナイフさばきを見たおかげで、彼女の中で「上等な剣」を買うことが差して重要な意味を持ってないからだった。
要するに、剣を買うという口実で彼にプレゼントをあげたいのである。それにも大義名分が必要な年頃なのだ。
そして彼女はそういった自分の深層心理を理解できておらず、この建前・口実・大義名分を頭の中で信頼し切っている、という言葉にすると複雑だが、その実、中身は単純明快な面白い状況に立って

いた。
閑話休題。
「なるほど、じゃあ期待してるよ」
そういった志貴の語調というか、雰囲気がどこか嬉しそう……ルイズはそんな風に思った。

「へい、いらっしゃい！！　……これはこれは貴族のお嬢様。どういったご用件で」
「私の従者に、良い剣を見繕って頂戴」
生活用品をあらかた買って最後にやって来た武器屋、そこでルイズは開口一番、店主にそう注文した。
志貴は入るなり、店内の武器を物珍しそうに見て回っている。
「従者ってのは、あそこの包帯巻いた兄ちゃんですかい？」
「そうよ。あれに見合った、上等なのをね」
「そうですね……、ちょいと待っていて下さい」
店主はそういって、奥に引っ込んでいった。おそらくルイズの言うような上等なものをとりにいったのだろう。
ルイズが振り向くと、志貴は手にした武器をしまって、はぁ、と小さな溜息をついていた。
「何してるの？」
「武器見てたんだけど、あんまり上等なやつがないね」
「馬鹿ね、本当に良い武器はこんなところに置いてないでしょ」
「そんなもんなの？」

「そうよ。だから店主も今、店の奥に引っ込んだでしょ」
そうやって知った風な口をきくが、先程述べた通りルイズには武器の性能としての善し悪しはわからない。なので志貴のそんな落胆に、本当に分かってんのかしら、と怪訝な目で疑っていた、
「じゃあ、期待してようかな」
「い～や、期待してなくていいぜ」
そんな時、どこからか聞き慣れない声が店内に響いた。
志貴とルイズはきょろきょろと店内を見渡す。
「ここだ、ここ」
「ここ……ここ……どこだ？」
声はすれど、姿は見えず。志貴が声の聞こえたあたりを探すと、それを見ていたルイズはとある可能性に思い至った。
「ここ、って……まさか、インテリジェンスソード？」
「何それ？」
「意志を持った、喋る剣のことよ。つまり、この声は剣が発してるの」
「その通り、娘っ子！　そこのホウタイ、今お前さんの目の前のかごに入ってる剣さ！」
「あ、今かたかた揺れた奴」
志貴の目の前にあるかごの、数本の剣が刺さった中に、小刻みに揺れる剣を見つけた。
どうやら、これが今まで喋っていたらしい。
志貴は物珍しそうに、喋る剣を手に取った。

「！」
「おっ！」

そしてその瞬間、僅かに左手のルーンが光った。

「どうしたの？」
「あ、いや。急に左手が光って」
「……へぇ、おでれーた。お前さん、『使い手』か」

戸惑う志貴の手の中で、剣は感心したように呟いた。

「『使い手』？」
「ホウタイの兄ちゃん、どれくらいの剣が欲しいんだ？」
「え？　ああ、最低限これくらいの」

突然話を振られて戸惑いつつも、志貴はポケットをまさぐってナイフを取り出した。
志貴はルイズに剣を買ってもらう上で、戦闘用に使えるものを最低条件として考えていた。その基準が、ポケットに持っていたナイフである。
この最低条件は、志貴がルイズの使い魔として生活していく上での最低条件と重なる。即ち、ルイズの身を守るためにも、上等なものでなければ話にならないのだ。
もちろん、使い慣れている（のだろう、よく手に馴染む）このナイフで彼女の安全を確保できるのならばそれが一番良い。しかし不測の事態ということが無いとも限らない。なので、そのためのいわば保険だった。
志貴が取り出したナイフを、喋る剣は繁々と観察……したのだろうか？　ややあって、

「なるほどな。じゃあお前さん、俺を買ってけ」
「えっ？」

剣がそんな提案をすると、志貴が惚けた声をあげた。

「何で、あんたみたいなボロいを買わなくちゃいけないのよ」
「ボロいとは何でぇ！　……貴族の娘っ子、その兄ちゃんの目は確かだぜ」
「はぁ？　どういうことよ」
「そのナイフ、かなりの業物だ。魔法効果とかは無いが、この店にあるナマクラじゃ足下にもおよばねぇ。その点俺は、６０００年生きてる伝説の剣だからな！」
「……胡散臭いわね」
「へい、お待たせしました！」

ルイズがジト目で剣を見ていると、店主が店の奥から戻って来た。

「こちらなんかいかがでしょう、シュペー卿の業物で」
「ケ、ほら来た。そんなナマクラ、高値で売りつけようとしてんじゃねえぞ！」
「あ、こらデル公！！　バカなこというな、営業妨害だぞ！！」

店主が奥から持って来た一品を見せると、剣（デル公？）がそんな風に野次を飛ばした。
志貴とルイズは、その業物らしい一品を見る。きらびやかな宝石が装飾された剣だった。

「へえ、良さそうじゃない。綺麗だし」
「いや、う～ん……」

二人の反応は対照的だった。ルイズは装飾された剣を見て良い印象を抱いたようだが、彼女の発言に大して志貴は渋い顔でそんな風に唸った。

「何よ、気に入らないの？」
「いや、綺麗は綺麗だけど、……戦闘用じゃない。使えるやつじゃないと、ルイズを守るんだから」
「まもっ……！！」

志貴は溜息をついて、首を振った。

「ほらな。だから兄ちゃん、俺を買えって」
「……うん、そうだな」

暫し考えて、志貴は頷く。

「すみません、こいつおいくらですか？」
「こいつとは失礼だな。名前で呼んでくれよ」
「だって、お前の名前知らない」
「おお、すまねぇ！　俺はデルフリンガーってんだ」
「ちょ、ちょいと兄ちゃん。そいつで良いのかい？」

そんな剣、デルフリンガーと志貴のやり取りを困ったように見ていた店主は口を挟んだ。

「ああ、はい。何か、この剣気に入りまして」
「へぇ、それなら構わないんだがね……」

そして戸惑いながらも、店主は値段を告げる。
しかしこの国の貨幣価値を知らなかった志貴は首を捻り、ルイズの方へ向きなおった。

「ルイズ、お金は大丈夫なの？」
「……」
「……ルイズ？」
「……はっ！？」

何故か呆然としていたルイズは、志貴の呼びかけで我に返り、どうしてか顔を真っ赤にしてふんぞり返り、志貴を指差した。

「つ、使い魔なんだからあたし守るのは当たり前でしょ！！」
「はい？」

ルイズと店主の話を聞く限りでは、デルフリンガーはかなり安かったらしい。なんでも文句ばっかり言っては客を困らせていたので、店川としては厄介払いの意味も込めていたとか。
清算をすませ、武器屋から出ると何故かキュルケとタバサいた。志貴を追って来たらしい。この辺りの話は、次回の冒頭で詳しく述べることになるが、ここでルイズは天敵との遭遇で、喧嘩（キュルケにとってはじゃれ合い）をおっぱじめる。
そしてその光景を微笑ましく見ていた志貴の視界に、

一匹の、
黒猫が、

横切った。

第8話（後書き）

最近就活で西へ東へ夜行バスに乗ってるから、疲れがたまってあれな感じです。Ｄ－５４です。

今回ちょっと型月との関係性を入れたかったので、最後こんな感じにしています。

ちゅうわけで黒猫はもちろんあの娘です。

これからフーケ編が始まるわけですが、まだ大筋は変わりません。けどちょくちょく小細工気味に型月と絡ませます。大丈夫かなぁ……？

それはそうと、感想いただいた方、ありがとうございます。これ投稿したらマッハで返事を書かせていただきますので、ご容赦ください。

それでは。

就活すめば、もう少し早くなる……かもｗ

第9話（前書き）

お久しぶりです。
就活が一段落ついたので投稿させていただきます。
あんなに間隔が開いた割に今回は短いです。

第9話

「あー、ダーリン見っけ！！」

武器屋でデルフリンガーを購入したルイズと志貴が外に出たちょうどその時、そんな声が二人の耳に届いた。振り向くと、そこそこ離れた場所に二人組の女の子がいる。そのうちの一人は何やら嬉しそうにこちらを指差している。

「げっ、ツェルプストー」

誰だ、と志貴が思う前に、ルイズが嫌そうに漏らして気付いた。なるほど確かあの特徴的な赤い髪と長身、ルイズとは違ったむ

「何かあんた、失礼なこと考えようとしてない？」

「気のせいだろ？」

雰囲気を醸し出す彼女は、確かにキュルケだ。

「ハァイ、ミス・ヴァリエール。必然ね」

「つけてたの！？」

「『偶然ね』と言わないあたり、正直者ととらえた方が良いのか」

「あたしはいつでも正直者よ」

そんな風に笑いながら、キュルケともう一人、まるで彼女と対照的な少女……タバサが、二人して近づいて来た。

「何よ、タバサまで……どうしてここにいるのよ」

「そこにダーリンがいるから」

「興味本位」

当たり前じゃない、とキュルケが呟くと、タバサが志貴のそばへ寄って来て、彼を見つめた。ある程度身長差があるので、タバサが志貴を見上げる形になる。それを見て、ルイズはむっと怪訝な顔をしてタバサを睨んだ。

（……興味本位？）

顔には出さなかったものの、訝しく思ったのはキュルケも同じである。だが、今のタバサを見る限りは、それほど色のある興味ではなさそうだ。どちらかと言うと植物とかの観察に近い気がする。前代未聞の平民の使い魔だからか、それとも決闘で見せた彼の戦闘技術にでも興味を持ったのだろうか。

（ただ、これからそういう方向に色づかないとも限らないわね……）

そんな懸念が過るも、

（ま、それはそれで面白そうだわ）

と、親友の希薄な感情を心配してなのか、或いは本当にただ面白そうだからなのか、そんな風に思い、今はタバサを観察するのみだった。

「えっと……」

一方、タバサに顔を覗き込まれた志貴は訳が分からず、戸惑いの声を漏らした。

そんな彼の反応に、タバサは首を傾げる。以前、真夜中に話もし

た筈なのに、彼女にとっては不可解だった。

「何よタバサ、私の使い魔に何か文句があるの？」

「……」

そんな光景にいらついたルイズがとげとげしくそう言うと、タバサはルイズの方へ首を向け、再び志貴へと視線を戻す。

「へェ、タバサちゃんっていうんだ」

（もしかして、覚えていない？）

タバサは思い、追求しようとしたがその直前で、

（そう言えば、名乗ってなかった）

ということに気がついた。

（……まあいいか）

タバサは考える。

この使い魔は怪しいところが多すぎる。違う世界がどうこう言うのももちろん、そもそも二重人格という病気も眉唾物だ。

「人格」というのなら、ファーストコンタクトがあれほど飄々として人を喰ったような相手だったのだ。今この場面でのこの人物が、夜の「彼」が仮面を被った姿だと、大した役者だと、そう考える方がそのまま話を鵜呑みにするより分かりやすい。

しかし、憶測でしかない。疑うにも信じるにも、その材料が少なすぎた。

「……よろしく。”ちゃん”はいらない」

なのでタバサは、それだけいって志貴から距離をとった。様子見である。
それを確認したキュルケは、クスリと笑う。そして嬉しそうに志貴に駆け寄り、勢いよく抱きついた。

「んもぅ、ダーリンったら、モテるわねぇ！」
「んなぁ！？　ちょっとツウェルプストー！！」

離れなさいよ、ルイズが叫ぶと、キュルケがいやらしく笑って彼女を見た。
喧嘩が始まる。

「モテるなぁ、相棒」
「そういうのとはちょっと違うだろ。にしても、仲がいいなぁ」
「ちげぇねぇ！　喧嘩するほど仲がいいってな！」

怒鳴るルイズとひらりはらりと受け流すキュルケを、志貴はどこか暖かい（包帯に隠れた）目で眺め、ついさっき買った喋る剣、デルフリンガーと談笑する。

その、視界の隅。

（ん？）

志貴以外、誰も気付いていない。
こちらを伺う、視線。

（あれは……）

普通の人なら気に求めないだろう、何故ならそれは人の視線ではなく。

（黒猫だ）

大きなリボンを首に結んだ、黒い猫のものだからだ。

何故気付いたのかは志貴にも分からない。何となく気付いただけだろう、どうでもいいかと思う直前、

（……黒、猫？）

黒い猫は身を翻し、駆け出す。

志貴の視界の隅から隅へ横切った瞬間、彼も駆け出した。

「あ、シキ！？」

突然走り出した志貴に何事かと反応したルイズは、咄嗟に彼の名を呼んだ。

しかし聴こえていないのか駆け抜けていく志貴を、残された三人は暫し呆然と眺めていた。

「ちょ、ちょっとどうしたのよ！」

「え、何なに！？」

そして、すぐに我に返ったルイズが再び叫ぶと、三人はすぐに彼の後を追った。

「はあ、はあ」

息を切らしながら、志貴は町中を駆け、黒猫を追う。
何か引っかかる。そんな漠然とした理由で、追いかける。

「待ってくれ！」

全力で走っていても、疎らに人がいるせいか思ったより距離は縮まらない。つかず離れず、一定を保っていた。
否。一定の距離を、保たれていた。
黒猫は距離が離されそうになると逐一立ち止まって志貴の方を振り返り、縮まるとまた走り出して、を繰り返していた。

「君は、」

やがて、猫は立ち止まり、それを確認した志貴も走るのをやめた。
ゆっくり近づこうと足を一歩踏み出すと、それに合わせて黒猫が振り返る。

「君は……」

言葉を探しながら、もう一歩、近寄ろうとすると、

「シキ！！」

志貴を追ってルイズたちが町中を走る続けてしばらくすると、人気があまりなくなった場所、街の入り口で、彼は立ち止まった。

呆然としている。彼の背中を見て、ルイズはそう思った。

「シキ！！」

呼びかけると志貴はびくりと肩をふるわせ、ルイズたちの方を振り向く。

「ルイズ……」

ぽつりとそう呟くと、今度は何かに気付いたのか再びさっきまで見ていた場所を振り返る。

そこには、何も無かった。

「どうしたのよ！？」

「いや、猫が……」

「猫？」

彼は困惑したかのようにぼんやりと言った。

「何よ、猫がどうしたって言うのよ」

「ダーリン、猫が好きなの？」

「えっと、何というか……」

ルイズとキュルケが問いつめるように志貴に迫る。志貴は表現に困っているのか、言いよどむ仕草をした。

「さっき、大きなリボンをした黒猫がいて」

「黒猫？」

尋ねると、志貴は小さく頷いた。

「何よ、そんなのどうでもいいじゃ……」
「……それで？」

ルイズが言い終わる前に、タバサがそういって志貴に発言を促した。むっ、とルイズはタバサを睨む。

「それで、引っかかったと言うか、気になったと言うか……」
「引っかかった？」
「……気になった？」

ルイズ、タバサがそう聞くと、志貴は頷いた。

「そいつは俺を知っている気がして、……俺はそいつを知っている気がして」

一瞬だけ、刺すような頭痛が志貴を襲い、頭を激しく左右に振った。

「ちょっと、大丈夫なの？」
「え？　ああ、うん」

改めて、三人の女の子を見る。

「帰ろうか」

トリズテイン魔法学院の離れに、古びた大きな建物がある。

そこは宝物庫。学院に代々受け継がれた重要なマジックアイテムなどが保管された、敷地内で最も厳重な場所の一つである。
その宝物庫の扉の前で、質素なローブを被った人物が、一人立っていた。
其の視線の先には、扉にかけられた大きな錠前。しかしその人物が見ていたのは、その錠前をはじめとした宝物庫そのものにかけられた魔法だった。

「……ちっ」

ルイズの使い魔同様に顔は見えないが、その表情が苛立っているように見える。ローブの下で忌々し気に舌を打った。
そして辺りを見渡し、誰もいないことを確認すると、身を翻して足早にその場を去って行った。

第9話（後書き）

今日でこのお話を始めて1年ということですが、1年かけて9話って遅くね、と思ったり。
どうも、Ｄ－５４です。

就活も終わったのでペースアップしたいと思いつつも、オリジナル作品を投稿してみたいという欲求にかられたりもして、ままならねーです。
オリジナルのアイデア（と言う名の妄想）だけは大量にあるんですよ。
廚二なのとか、廚二なのとか、青春物とか、廚二なのとか。
けどこっちのペース遅くなるし、どうしよっかな。

あと、感想のお返事、毎度ながら投稿したらすぐに書かせていただきます。ありがとうございます。感想のお返事につきましてはそういうスタンスでいこうと思いますので、どうぞ宜しくお願いします。
次回から本格的にフーケ編に入るので、とにかく頑張ります！！

……8話と9話、別にわける必要なかったな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3030i/

ゼロの使い魔は殺人貴

2010年10月15日13時01分発行